法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-07-13

学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学，キャリアデザイン学部学生サポート委員会

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン
(巻 / Volume)
12
(号 / Number)
2
(開始ページ / Start Page)
191
(終了ページ / End Page)
239
(発行年 / Year)
2015-03

Hosei University Repository

学生活動サポート奨励金とその報告

法政大学キャリアデザイン学部学生サポート委員会

学生活動サポート奨励金制度は、学生の自主的活動の促進を目的として設けられている制度である。

2014年度には、14団体が奨励金助成を受け、各団体とも独自の意義ある自主的活動を展開した。

その活動報告をここに掲載する。

各団体のメンバーは、それぞれの活動を通して、一定の成長を遂げたのではないかと思う。

そうした成長には、①知らなかったことを知るようになった、見えていなかったことが見えるようになったという成長、②知っていることでも、その知っていることに対する見方や意味づけが変わっていくという成長の2パターンがある。

各自、参加した活動の経験を通して自らがいかに成長しえたかを内省しつつ、今年度の活動の成果と残された課題に関してメンバー間で議論し合い、認識を共有していってほしい。

次年度も、多くの団体からの積極的な応募があることを期待する。

なお、本奨励金は、法政大学キャリアデザイン学会から支出されている。

記して感謝申し上げます。

（文責：佐藤　恵）

Hosei University Repository

クルマを身近なもののにしよう！
～カーシェアリング普及大作戦～

代表者：酒井ゼミ　クルマ離れ対策チーム　阿部優希

1　実施概要

私たちは通年を通して主に次のようなことをした。

若者のクルマ離れについての現状調査アンケート（151名分収集）、カーシェアリングについて実際に体験しての研究調査、タイムズ24様と合同でプロジェクトするにあたり、競合他社サービスの利用調査、法政大学内での講演会（2回）、上京生へのクルマ保有に関するアンケート（63名分収集）、Facebook や Twitter などの SNS を通してカーシェアリングの PR 活動、などを行ってきた。また、2月中にパーク24様とグループインタビュー形式で座談会を実施する予定である。

まずは若者のクルマ離れの現状調査のために、3月末にアンケート調査を実施した。その結果から、若者の生活スタイルにカーシェアリングを取り込めば、クルマが断然身近な存在になると考え、普及活動を企業と合同で行うことにした。

実際に学生が利用するときの利便性を考え、規模数最大のタイムズ24様へ提携を申し込んだところ、快く承諾してくれた。そこから「まずは学生と一緒にイベントを行う」ことを目標に、合同で活動がスタートされた。そこで第一弾として行われたのが、法政大学内での講演会である。

※右の写真は講演会用に5000部作った、ポスターの写真である。

講演会までに数回打ち合わせをし、事前に駅や大学内で社員の方と一緒にチラシやうちわを配ったりした。

また、学内の掲示板やキャリア情報ルームなどにも宣伝をさせていただいた。

講演会が終わってからは、より学生がカーシェアリングを身近に感じてもらえるように、SNS で PR 活動を行った。

私たちが実際に利用し、その利用シーンを紹介することで新たな学生ライフの提案と興味をそそることを目標とした。週に数

Hosei University Repository

回、さまざまな利用シーンを掲載しながら、同時に競合他社のサービスを利用することで私たち自身の研究にも役立っていた。

その他には、レンタカーとの違いを実際に利用しながら研究をして、それをSNSなどを通してPRするなど非常に有意義な研究になった。

また、講演会やPR活動の結果は良好で、周りの学生のクルマやカーシェアリングのイメージが向上した

2月にはパーク24様と合同で、免許取得後1年以内の学生を複数人集めて、グループインタビュー形式の座談会を行う予定である。

2　結果・意義・所見

私たちは2014年の3月に、150人以上を対象にアンケート調査を実施した。調査の結果からは、興味深いことがわかった。最初に、クルマに対する印象を聞いたところ、最も多かったのが「ドライブが楽しい / 楽しそう」という意見だった。次いで多かったのは「移動やレジャーに便利」という意見で、その後に「駐車場や維持費がかかる」という意見が続いた。そして、次にクルマへの関心を聞いたところ、80パーセント以上の男女が「所有したい」と答えたのだ。この結果は非常に衝撃的だった。世間や大人がさんざん騒いでいた「若者のクルマ離れ」とは、事実がまるで大きく違っていたのだ。私たち若者は、確かにクルマに興味があるし、乗りたいとも、所有したいとも思っている。しかし、現実的な問題として、クルマを所有できないことが「若者のクルマ離れ」と言われてしまう由縁ではないだろうかという考えに行き着いた。若年層の運転免許取得率の水準は10年来ほとんど変化していなく、依然として高水準を保っている。これはアンケート結果からもわかるように、将来必要な資格であると同時に、クルマに対する関心がある証拠であろう。だが、一方でクルマの保有率が低下しているのはなぜか、また、なぜ保有率に関心がつながらないのか、ここに「若者のクルマ離れ」という問題の根源があると考えた。

今日では、ファストファッションの誕生などによって、若者の生活は低価格で賄えるものになった。美味しいものは安く食べられるし、都内であればくまなく張り巡らされた鉄道によって、数百円程度で早く正確に目的地にたどり着くことができる。それに対し、クルマと言えば、燃費こそ良く

Hosei University Repository

なったものの、駐車場代や保険料をはじめとする維持費は変わらないばかりか、価格が上昇している。現状では、いくら自動車メーカーが魅力的なクルマというハードを作っても、維持費や制度などのソフト面で、若者のクルマ購入のハードルを格段とあげてしまっている。

そんな若者のクルマ離れ対策の希望の矢が、カーシェアリングである。「クルマに乗りたい」という欲求を、低価格と高い利便性で叶えてくれるのだ。まず料金面では、2014年10月現在ほとんどのカーシェアリング事業者が、学生の月額料金0円のプランを採用している。つまり、使った分だけお金を払う仕組みで、インターネットで音楽を購入する感覚でクルマを利用できる。次に利便性の面では、カーシェアリングはレンタカーと違って、無人で、しかも24時間いつでも貸し出しや返却を行うことができる。また、会員であれば難しい貸し出し手続きは必要なく、手持ちのパソコンやスマートフォン、携帯電話で驚くほど簡単に利用することができる。近年ではシェアすることのできる車両数がコンビニエンスストア並に増えており、これからも増え続けていくだろう。このような、若者のクルマへの関心を高め、応えてくれるカーシェアリングを、私たちは若者のクルマ離れ対策プロジェクトの一環として、若者に向けアピールし、それを通してクルマに乗る機会を作り出すことにこのプロジェクトの意義があると考えた。

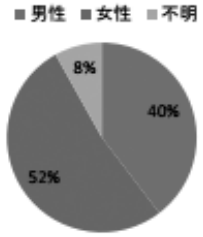
私たちの今期最後のプロジェクトとして12月に行ったカーシェアリングの講演会の後のアンケートでは、講演会やPR活動を通して、大学生にむけてカーシェアリングの認知度があがったこと、また、根本にクルマへのイメージが良いことが再確認できた。(本文最後にアンケート結果参照) 実際、カーシェアリングサービスに加入し、利用した学生も多く、その利便性も学生にも実証してもらえた。ここから、私たちの「若者にとってクルマを身近な存在にする」という目標は徐々にではあるが到達しつつあるといえよう。今後とも、ゼミのプロジェクトの一環として調査研究をしていきたいと思う。

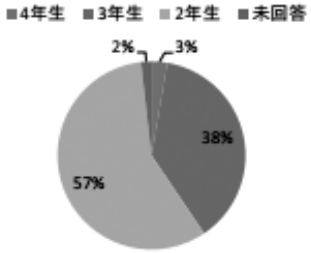
以下に12月にとったアンケート結果を記載する。

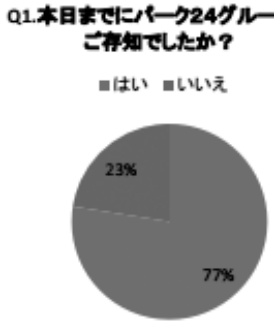
講演会を行ったことで、カーシェアリングという言葉の認知が上がり、将来利用してみようと思う学生が少しではあるが増えたといえる。

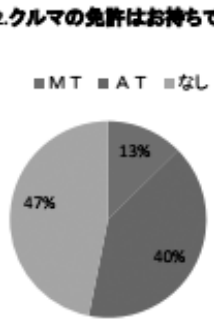
Hosei University Repository

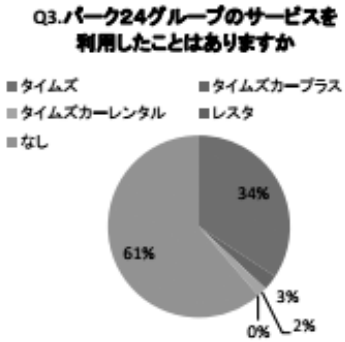
【日程】2014/12/18（木）13:30～15:00
【場所】法政大学　市ヶ谷キャンパス　58年館834教室
【受講】2～4年生
【有効回答】111名分

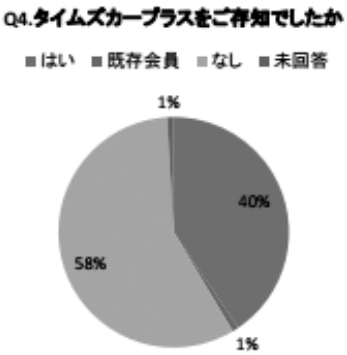


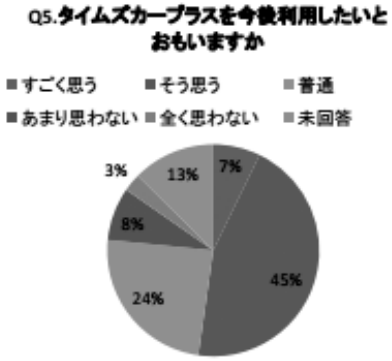












Hosei University Repository

＜生き方・働き方＞の哲学

代表者：田中ゼミ　3年　安増小絵

1　実施概要

現在社会で活躍されている方々から話を聞き、＜生き方・働き方＞の哲学を学ぶことを目的とし講演会を1年間に渡り5回実施した。

＜準備＞

・ TwitterやFacebookなどのsnsを利用し、講演会情報を拡散する。
・ プロジェクターなどの講演に必要なものを事前に用意する。

＜講演会実施日＞

6月4日
大浦　清氏（エアフレイム代表取締役社長）
内容：情報過多時代の＜情報の身体化＞
実施担当者：栗田　隼介・菅野　愛

6月9日
杉山　大輔氏
内容：行動する勇気～その一歩が想像もつかない未来につながっている～
実施担当者：佐藤　一幸・安増　小絵

6月30日
平尾　丈氏（じげん 代表取締役社長）
内容：じげんを超えるキャリア論
実施担当者：渡邉美菜・金城仁美

7月6日
呉京樹氏（クリエイターズマッチ代表取締役社長）
内容：クリエイターエコシステムが創り出す「世界」～その展望と事業戦略～
実施担当者：横田ひかる・亀田千菜美

7月9日
井元剛氏（RE.RA 代表取締役社長）
内容：教養としてのプログラミング入門
実施担当者：興野咲・小野田寛之

2　結果・意義・所見

＜結果＞

講演を聞くことで、様々なキャリアモデルや社会人として必要なもの、考え方はどのようなものか学んだ。その後講演参加者でディスカッションし、意見の共有することで、多角的に物をとらえることができた。

キャリアデザイン学部生として「キャリアデザイン」「ワークライフバランス」といった物をテーマにした授業に参加してきた学生は、キャリアに対する自分の確立した考えを持っている人が多い。その一方で自分自身がつきたい職や自分が働く姿を具体的にイメージ出来ない人も数多く存在する。この講演会では、その具体化出来てない部分を明確にして行くことができた。講演会とその後のディスカッションでは「就活を前に自分のやりたいこと、適しているものを考えるのではなく、普段から様々なキャリアのあり方を知り、自己のキャリア形成を考えることで、早期に目標に向けた行動が可能となり、個々のキャリアアップに繋がる」と考える学生が多かった。

働き方・生き方という面では、人生の先輩として、大学のときにやっておくべき事や、講演者の考え方・物事の捉え方を教え

Hosei University Repository

ていただいた。私達は授業を通し、数多くの題材についてディスカッションを行なっているが、そこでは決してでる事のない奇想天外な物の見方に魅了されることも多くあった。

上記に述べたように講演会では、キャリア形成の1例を本人が語ることで、参加者が現実的に自己キャリアについて考える事が出来た。これは講義形式の授業では得られなかった物であろう。講義でキャリアに関する知識、考えを養い、講演を通し将来を具体的に想像し、行動することができるようになったと考えている。

提言：＜生き方・働き方＞の哲学

講演者は直感的に物事を進めて行くタイプだったり、細かく目標を定め目的を達成して行くタイプであったり、その生き方・働き方は様々であった。しかし1時間半の講演の中で2つだけ講演者が口をそろえ大切だと語ったことがある。私たちは講演後のディスカッションでもその重要性を感じ、これから社会にでる人として身につけるべき事だと感じた。そこでこの2つを本企画のテーマである＜生き方・働き方＞の哲学としてあげたいと思う。

1、自分に向いていること、好きなことを知覚する。

・過去の経験

過去にどのような経験をしてきたか、その経験でどのようなことを感じたかといったことを振り返ることで、自分が興味のある領域、夢中になる状況が見えてくる。また自分のターニングポイントとなる出来事により、大切にしている価値観がわかるだろう。過去の経験を振り返ることにより、「自分はこうありたい・こうあるべき」といった意思ではなく、本来自分に向いていることや、一貫して大切にして来た物が見えてくる。つまり「自分とはなにか」を知ることが重要である。

・キャリアモデルを見つける

キャリアモデルは伝記にのるような偉人から、父・母のような身近な人まで様々である。このようなモデルがいることにより、将来の働く姿や家族との生活をリアルに想像することが可能となる。キャリアモデルという目標に向かい、努力することは仕事に充足感を与えると考えられる。またそのキャリアを模倣して行く中で自分らしさが加わり、自分だけのキャリアを形成することができる。キャリアモデルは自分がなりたい姿を多様なキャリア形成の中から発見しなければならない。それだけでなく単なる「憧れ」では現実とのギャップが生じてしまうため、その内容も重要である。したがって、多くのキャリアを比較・検討することが求められるといえる。

2、行動する勇気

・働き方

講演者が共通し述べた行動力の重要性だった。私達は変化する勇気があるだろうか。変化の激しいグローバル社会の中で働くこととなる私達には適応し、生きて行くことが求められる。そこで提案される働き方は、自分の得意とする物や身についている物を軸とし、もう一方では自由に興味のあることに挑戦して行く働き方である。自分にはこれしかないと的を絞るのではなく、好奇心を持ち多様な挑戦をして行くことで視野が広がり、チャンスが生まれやすくなるのである。

・偶然を作る

人々が偶然と思っている事は、実は偶然ではなかったりする。自分が行動することで、人との出会いが生まれ、後にその出会いが仕事や人生の充実を生むのであ

Hosei University Repository

る。自分で日頃から行動する事が実を結び、幸運をもたらすのである。したがって会いたい人がいるときは、出会いを待つのではなく、自らアポイントメントをとってみたるといった行動をとる事が大切なのである。

Hosei University Repository

まちづくりと行政・市民の連携の在り方を探る

～青森県金木町の事例から～

代表者：金山ゼミ　稲葉 智

1　実施概要

私たちは今回、過疎であったまちをもう一度再建しようと立ち上がり、まちおこしの成功を果たした青森県五所川原市の金木町にスポットを当てて、現地調査することを企画した。

金木町という小さな地域に焦点を当て調査対象としたのは、過疎化が進んでいた地域を、「太宰治生誕、津軽三味線発祥の地」という強みを最大限に生かしつつ、まちの再建に向けた取り組みが顕著に見られたからである。調査地域を一つに絞ることで、ひとつのまちの取り組み方を様々な角度から調査することができ、より質の高い研究になるのではないかと考えた。

調査を通じて、まちづくりを成功させるためのポイントは何か、まちづくりをするにあたって行政と住民にはどのような意識の差があり、双方の連携を図るために必要なことは何かを明らかにすることが、今回の企画の肝である。

まちづくりと行政・市民の連携のあり方を五所川原市の6施設、団体を対象に調査、また金木町でのフィールドワークを行い、報告書にまとめた。対象施設は、五所川原市役所金木総合支所、NPO法人かなぎ元気倶楽部、金木商工会、斜陽の詩、立佞武多の館、津軽鉄道である。

日程　2014年9月9日～11日

・五所川原市金木町での現地調査
・五所川原市金木町、行政職員へのヒアリング調査
・NPO法人、商工会へのヒアリング調査
・地元産業へのヒアリング調査
・文化施設、津軽鉄道職員へのヒアリング調査

9月9日
五所川原市役所金木総合支所文化スポーツ課
　担当課職員ヒヤリング調査
　現地調査

9月10日
NPO法人かなぎ元気倶楽部・金木商工会
　職員ヒヤリング調査
　現地調査
斜陽の詩
　職員ヒヤリング調査
　現地調査

9月11日
立佞武多の館
　職員ヒヤリング調査
　現地調査
津軽鉄道
　職員ヒヤリング調査
　現地調査

調査担当

稲葉智　担当：五所川原市役所金木総合支所
尾名高慎也　担当：NPO法人かなぎ元気倶楽部・金木商工会
工藤喬嗣　担当：斜陽の詩
坂本愛実　担当：立佞武多の館

Hosei University Repository

大高愛純　担当：津軽鉄道

報告書作成

日程 2014年 12月 16日

・報告書の印刷、製本 担当：全員
　調査を踏まえ、具体的な提言を全員で考察し報告書としてまとめた。
　報告書の印刷、製本を行った。

その他

・フィールドワークまでに、五所川原市金木町のあゆみ、観光、まち情報の事前調査を行った。
・報告書の制作までに NPO 法人指定管理者制度の文献調査、各施設利用者状況、財政状況調査を行った。

2　結果・意義・所見

事前調査で分かった評価を基に、現地でのフィールドワーク、ヒアリング調査を行った。五所川原市役所金木総合役所へは、行政の視点からのまちづくりに関するヒアリング調査を行った。NPO 法人かなぎ元気倶楽部・金木商工会へは、市民団体視点からのまちづくりについてヒアリング調査を行った。斜陽の詩では地場産業としての視点からどのように地域、まちづくりを捉えているか、ヒアリング調査を行った。立佞武多の館では五所川原市の大きな文化施設の一つとして職員へまちづくりへの意見をヒアリング調査をした。同様に津軽鉄道においてもまちへの貢献、市民意識、まちづくり意識を持つ視点からヒアリング調査を行った。

調査から、金木町におけるまちづくりの問題点、行政視点のまちづくりの特性、また市民視点のまちづくりの特性を得た。そこから行政視点と市民視点のまちづくりにおける、市民の意識の差を比較した。またそれぞれのメリット、デメリット等からより理想的なまちの在り方を考察した。その後、金木町の現状を踏まえ、金木町における町のさらなる活性化、文化継承、そして持続可能なまちづくりを行うための具体的な提言を考察し、報告書にまとめた。

以下は報告書の評価、提言である。

評価

今回の調査からみた金木町全体の評価をしていきたい。町自体の評価として金木町は一般企業が少ない、若者が少ないという 2 点の特徴を持っていた。

まずは一般企業についてである。町を歩いていた時も個人経営のお店はいくつか見られたものの、コンビニやファミリーレストランといった現代の生活に根付いているお店を中心に大手の企業の存在はほとんど見られなかった。そういった大手企業がない分個人経営の店が充実していれば困ることはないだろう。だが、金木町自体にお店がそもそも少なく、特に飲食店などはごくわずかであり、なにより宿泊施設については一軒もないという現状であったので、観光で訪れるには不便を感じる点が多いのではないかという印象を受けた。

また若者が少なかったことも目に付いた点の一つである。2日間町を歩きいろいろな場所を見て回ったが、立ち寄った先でも道を歩いていても若い世代の人々に会う機会はほとんどなかった。実際、若者がいないことは金木町でも問題視されているようだ。若者がいないことを危惧している住人の方もいるということがインタビュー調査で分かったが、その問題を解決するための有効な手段はまだとられていないようであった。

次にまちづくりという観点から金木町の評価をしていきたい。まちづくりという点において金木町は地元の人が中心となって様々な活動をしている、また町が培ってき

Hosei University Repository

た文化をうまく活かした活動をしているという2つの特徴があった。以下よりこのことについて述べていきたい。

前者についてだが、金木町は先ほど説明をした「かなぎ元気倶楽部」というNPO法人が中心となって地元の人と一体となった活動をしていた。活動はお祭りからフリーマーケットまで多岐にわたっており、それらはそのまま町の活性化に繋がっていた。

後者についても、活動の中心となっていたのは「かなぎ元気倶楽部」であった。町の持つ文化を活かしたまちづくりをうまく行なっている印象を受けた。具体的には、金木町出身の有名人である太宰治をアピールするために彼の生まれ育った家を観光地化させて一般人に向けて開放している斜陽館、町のあちこちに彼の書いた本の一節が書かれた看板が置かれているなど、文化を町のアピールに繋げられていたようだった。

このようにまちづくりの観点から評価すると、「かなぎ元気倶楽部」が金木町に大きな影響を与えていることがわかる。NPO法人が行うまちづくりは全国的に見ても貴重なケースであり、一般的には行政が担当する業務だ。しかし、金木町の行政団体は「かなぎ元気倶楽部」にまちづくりを委託している。インタビュー調査でも一緒に行うという姿勢ではなかった。金木町はNPO法人並びに町民たちの活気に溢れた街だが、行政の支援がないというある種珍しいケースとなっていた。

以上のことから、金木町に住む人々には活気があり文化を活かしたさまざまな活動も行っているのだが、飲食店や宿泊施設といった、観光客などの外から来る人間を受け入れるための体制は整っていないと評価できた。町自体の魅力はあり町人にも活気はあるが、行政からの動きはほとんどないという評価もできた。

現状評価をもとにしたまとめ・考察

まちづくりを成功させるためのポイントについてだが、行政に頼らない地域住民の積極性が大きく関係している。金木町の場合、NPO　法人という地域住民が集まった団体でまちづくりを行っていた。もちろんこの人々はまちづくりに関するプロではなかっただろう。しかし、その地域を一番理解しているからこそ外から呼ばれた人々よりも熱心に取り組めるのではないだろうかと考える。

もう一つは行政と住民との関係性についてだ。当然、行政と住民が一体となってまちづくりに貢献することが理想であるが、多くの地域は行政が考えているだけという片寄ったものになってしまっていることが現状である。しかし、今回の金木町の事例において、逆の片寄りが生じていることが分かった。確かに、NPOの方が行政と違って柔軟に活動することができる。しかし、行政は行政でしかできない役割をするべきだと考える。具体的には、外部の人を受け入れる体制(宿泊施設等)や広報活動といったことが挙げられる。お互いの意識を高めあうことで、まちづくりはより豊かなものになるだろう。

今回、金木町を調査してNPOの人々や地域住民の活力を感じた。しかし、行政からはそういった活力は感じられなかった。町のさらなる活性化を望む面でも、文化を後世まで語り継いでいくという面でも双方がまちづくりに貢献することは必須であり、町がこれから解決していくべき大きな課題ではないかと感じた。

Hosei University Repository

10万人の世界都市を目指して。持続可能な地域社会を考える
―長野県飯田市をケースとして―

代表者：稲葉美里

1　実施概要

長野県飯田市において地域調査を行い、時代の転換期における日本の地域社会の在り方について学生目線で考察し、現在報告書にまとめている。また、報告書の提出や市長との討論を通じて「外から見た飯田市」について情報提供を行う予定である。また今回の調査を通じて得た情報は今後大学院での研究においても役立つものである。

■地域調査（担当：稲葉）

・2014年9月10日～12日
10日
　おひさま進歩エネルギー訪問、社長ヒアリング
　市役所職員3名（若手女性職員）へのヒアリング
11日
　新任公民館主事研修に同席、飯田市公民館副館長へのヒアリング
　川路地区の公民館活動へ参加、川路地区公民館主事へのヒアリング
　市長との意見交換
12日
　市議会産業建設委員会協議会傍聴
　南信州広域連合会議傍聴
　市役所職員（男女共同参画推進）ヒアリング

・2014年10月18日～21日
18日～20日
　解体新書塾への参加
　（公民館に関する飯田市と尼崎市、研究者による合同研究会）
20日～21日
　人形劇美術館訪問
　市役所職員（まちづくり）ヒアリング
　市長との意見交換
　市長同行（記者会見、打ち合わせ、協議会、宅建協会との懇親会）

・2014年10月31～11月2日
　農家民泊（千代地区）

・2014年12月4日～5日
　市議会本会議　代表質問、一般質問　傍聴
　市長との意見交換

■報告書作成（担当：稲葉、酒井）

・2015年12月～

■報告書提出（担当：稲葉、酒井）

・2015年2月末（予定）

その他

報告書の執筆にあたり、各種資料調査、文献調査を行っている。

1月以降も必要であれば適宜地域調査を行う予定である。

2　結果・意義・所見

長野県飯田市の地域調査を包括的に行ったが、調査を行っていくうちに飯田市のまちづくりにおいて鍵となっているのは高い

Hosei University Repository

市民性に裏付けられた市民の地域参画なのではないかと感じられた。従って、そのような観点からヒアリングを行い、飯田市の市民の方々へのヒアリングも積極的に行うように方向を定めていった。市役所への報告書は現在作成中であるが、以下のようなまとめ方をしていく予定である。

・地域（市民）社会として進歩的であること

飯田市ではまず産官学に関わる全ての人が「地域の価値」を共通の認識として持っている。それはイタリアでいう郷土主義（カンパニリズム）に近い考え方である。同市では、そうした認識を持つ人材が地域内に循環するようなサイクルを構築しようとしている。そのための施策として人づくり・産業づくり・地域づくりに取り組んでいる。また人口減少社会においても健全な地域の規模を保ち生活を営むため、広域で生活圏を捉え直し、社会福祉における連携などを試みている。また、単に人口を維持するだけではなく小集落を存続させることでそこにのこる文化伝統をも維持させる事を考える。これらのことは、表面上の施策や事業の次元ではなく行動様式、マインドセットといった次元での変化を必要とすることを示唆している。

・環境的に健全であること

環境自立都市を標榜する同市であるが、年間を通して日射時間が多く安定しているため、太陽光発電をいち早く導入し市民ファンドによりその設置数を増やしている。個人宅にも安価に設置ができる独自の融資精度を完備している。また、小水力発電事業は自治会を事業主体として実施し、その利益をまちづくりの費用に還元している。自らの地域にある資源を自らの地域が潤うために使用する、そのような考え方をエコロジーな考え方としている。

・経済が域内で持続的に自立していること

同市では経済自立度という指標を採用しており、地域の支出を地域の収入（外貨の獲得）でどの程度まかなえているかをはかるものである。これを高めるためには支出を減らすか収入を増やすかのどちらかである。支出を減らすことは遡れば質素倹約のような生活を地域に強いることである。同市では通常輸入に頼りがちなものを自分たちの地域で作り利益を得るような仕組みを作っている。これはジェイン・ジェイコブズの著書で呈示されていた輸入置換という考え方と同じである。例えば、LED 防犯灯を設置するための助成を受けたが単純に防犯灯を地域外から輸入するのではなく自らの地域で試行錯誤を経て作り、その後域外へ輸出した（1つの産業として成立させる）。これにより外貨の獲得量を増やし経済自立度をあげていこうとしている。しかし同市の経済自立度は右肩上がりとなっているわけではない。地域の経済が自立することは現在の日本経済の枠組みではそれほど難しいことなのだろう。同市では、官民連携により外貨の獲得を如何にしていくか、産業間の連携を強め如何に産業が自立していくか、を支柱にした産業振興政策に取り組んでいる。これは、これまでの日本地域が行なってきた工場誘致で産業振興をするといった考え方とは一線を画する考え方である。

・それら（上記４項）を基礎付ける土壌が豊かであること

同市には、日本的な地域社会を前提とした地域自治、団体自治が存在する。自分たちの地域のことは自分たちでなんとかしよう、という気構えを持った自治組織である。飯田市は、そのような地域自治を活かしサポートする立場として行政があるというスタンスである。

Hosei University Repository

飯田市の行政ではデザイン思考のできる人材が事業構想を統合的なアプローチで行っている、と市長が仰っていた。それは、現状から解を導きだすのではなく、今必要な結果から手段を編み出すような働き方、1つの問題を複眼的に捉える見方である。

また、ヒアリングを通して、飯田市職員には徹底した現場主義が根付いていることが分かった。このことは、戦後から脈々と受け継がれてきた公民館活動の伝統（集落ごとに設置されている）や現在の市政から積極的に取り組んでいる行政部署の現場主義化（農政課の一部を農協組合に事務所を構える、など）が可能とさせていると推測した。

議会が市民の意見をどのように吸い上げるか懸命に試行錯誤していた事も印象的であった。同市は地域の基本構想を市役所、議会、市民一体となってつくり上げた歴史をもつ特殊な地域である。歴史的な変遷を辿れば、市民が始めたことを行政や周囲の関係団体がサポートをすることは、幾度の危機（災害や経済の荒波）を経て培った歴史文化的な飯田の市民性であるとも言える。

Hosei University Repository

都産都省推進プロジェクト
～東京産野菜を食べよう～

代表者：酒井ゼミ　3年　岩瀬拓也

1　実施概要

東京の農産物の魅力をもっと学生に広めるというコンセプトのもとプロジェクト進行中。目的としては、①食料自給率問題、高齢化による農家の減少等の日本の農業が抱える問題。②新鮮・安全・美味しいという日本の農業の魅力の高さ。③地産地消、和食の無形文化遺産認定、東京オリンピックの開催という時代のニーズ。これら三つのことを企画目的とし、飯田橋にある Petit Bonheur（プティボノ）とコラボ。ランチの際のサラダバーに東京産野菜を取り入れる。それまでの経緯として、東京産物を生産している施設に訪問し、企画提案。対象施設は、セブンイレブン、青梅畜産センター、東京ワイナリー、ＪＡ東京あおばである。

〈企画提案〉
日程：2014年 7月
場所：セブンアンドアイホールディングス
東京産物を使った弁当販売の企画提案プレゼン
担当：全員

日程：2014年 10月 7日
場所：青梅畜産センター見学
TOKYO X や烏骨鶏等の東京特産物の生産現状と開発段階についての調査。流通経路紹介。
担当：下山裕之　森川里奈

日程：2014年 11月 21日
場所：東京ワイナリー
見学と企画提案
担当：岩瀬拓也　下山裕之

日程：2014年 11月 26日
場所：プティボノ
企画提案プレゼン→コラボ決定！「サラダランチ × 東京産農産物」
担当：岩瀬拓也

日程：2014年 12月 19日
場所：JA 東京あおば
内容：野菜生産者の方に東京産野菜を提供してもらうための企画提案、交渉。
担当：岩瀬拓也　下山裕之

日程：2015年 1月 16日（予定）
内容：プティボノにて、野菜生産者の加藤様と直接商談
担当：全員

日程：2015年 2月中～（予定）
プティボノにて、コラボ企画実施
担当：全員

Petit Bonheur とのコラボ内容
「サラダバーランチ × 東京産野菜」
Petit Bonheur では、ランチの時間帯サラダバーがある。そのサラダバーに東京産の野菜をメニューに取り入れる。
東京の農産物の魅力を学生に！というコンセプトのもと、飯田橋という学生が多く集まる土地でのコラボ実施のため、ター

Hosei University Repository

ゲットを大学生（特に女子大生）とし Petit Bonheur や大学の HP で宣伝。学生に発信するというコンセプトのもと、SNS を活用した宣伝。

その他

店舗内に POP 作成や大学内での PR 活動
東京の地産地消の先駆けとする。

2　結果・意義・所見

東京の魅力を学生に発信して再認識してもらい、東京ブランドの向上を目標に、東京特産物を使った企画販売を行う。東京の農産物を使用することでのメリットは生産地から消費地までの距離の近さが生み出す採れたて新鮮食材の提供。地産地消。

セブンイレブンには、東京の農産物を使った東京弁当、おにぎり企画の提案を行った。青梅畜産センターでは、TOKYO X や烏骨鶏などの東京特産物の流通経路確保の交渉を行った。東京ワイナリーでは見学とともに、東京産ワインを使ったコラボ企画の提案を行った。Petit Bonheur にはランチでのサラダバーに東京産野菜を取り入れる企画を提案した。

・セブンイレブンへの提案

「大学 × 企業の商品開発」という注目の集まる視点を軸に提案。法政大学内にあるセブンイレブンでの販売を目的としていたが、コンビニでの弁当販売となると、食材を大量に仕入れる必要があるが、提案した TOKYO　X や烏骨鶏、ウド等は生産に手間がかかり高価で生産量が決まっているため、コンビニなどの大量生産には向いていない。そのため仕入れるのが困難。東京の特産物自体が生産範囲、生産者が狭く、手間をかけて作っているため、それに限定した弁当作りは厳しいという結果になった。

・青梅畜産センター

企画販売の食材として使える東京特産物の TOKYO　X や烏骨鶏を飼育出荷しているため、現状や流通に関してお話を伺うために訪問。生産者紹介などもあったが、ここでは、出荷する際は一頭丸々しかできないため、私たちのニーズには合わない。部位ごとでの出荷なら東京ミートを当たった方が良いとのことであった。

また、出荷するにしても生産者が減少してきているため、とても価値が高く高価なものになるため、適していない。

・プティボノ

企画提案プレゼンから、コラボレーション決定。野菜の流通に関してはオーナーさんが流通の会社経営もされていることから、生産者の見つけるだけで良いとのことであった。2月中から企画実施予定。

・JA 東京あおば加藤様

少ないロッドで野菜を提供してくれる良心的な生産者を探し、協力してもらうよう提案。結果、野菜を提供してもらえるため、予定日に話し合い詳細を決定する。

〈結果〉

Petit Bonheur とのコラボ企画決定。

この企画実施により、野菜というと地方から出荷されてきたイメージがあるがそれを払拭し、東京産の野菜もあり、とても新鮮で美味しいということを知ってもらう機会になる。そこから、東京特産物のブランド力向上、認知度 UP を期待できる。また、時代のニーズから地産地消ならぬ都産都省の先駆けとなるに違いない。

〈企画推進に当たっての気づき〉

東京の特産物は日本の都市であり中心である東京内でもちろん生産されるものだが、

Hosei University Repository

農畜産物を育てるための十分な土地がない狭い範囲での生産に限られているため、生産者が少なく、地方での広大な土地での大量生産で売り上げを上げるようなことは不可能であるため、手間暇かけて丁寧に育てる。そのためコストが高く、生産量が少なく限られている。しかしその反面、大量生産とは異なり、一頭一頭、一つ一つ普通より丁寧に育てられているため、とても美味しいものとなる。

東京産の食材というとあまりパッと浮かばないものであるが、実際にはとても魅力的なものが沢山あるのである。値段に比例した価値が存在することが分かった。

東京の魅力はここにある。

東京のイメージは、日本のすべての中心、高いビル、便利な都市、楽しいなどと挙げられるが、本当の魅力は東京特産物にあり。

東京ブランドを掲げこれをもっと押し出すことで、東京の魅力発信となり多くの人がもつ東京のイメージとは違う本当の東京の魅力に気づいてもらうことが可能である。今あるイメージからさらにいいイメージが出来る。

時代のニーズ

今や時代のニーズとして地産地消は欠かせないものである。東京でも地産地消は可能である。もっと緑を増やし、自分たちが生活するために必要な食材を自分たちの土地で生産するような仕組みづくりを日本の中心である東京から作り上げ、発信していく。その基盤の第一歩としてこのプロジェクトをする意義が見い出せる。今後の日本を担っていく学生に知ってもらうことで、東京に住む学生に東京という都市は、農業や食料の魅力もあるのだと認知してもらうことが出来る。これにより、これからの東京特産物の魅力とその行く末は広い普及が期待できる。

〈この企画で期待出来る効果〉

- 東京特産物の都産都省の先駆けとなる。
- 学生やその地域周辺での東京特産物の認知度ＵＰ
- 東京ブランドの確立
- 学生がターゲットなことからSNSを活用した宣伝により、地域外からの集客・認知が可能。

Hosei University Repository

教育制度の違いが自尊感情に与える影響

―日本教育とオランダ教育の比較から―

代表者：尾木ゼミ　3年　杉原寿仁王

1　実施概要

日本教育とオランダ教育の違いについて、オランダへのFWによる質的調査と、日本の中学生に対するアンケート調査（生徒の偏差値や学歴に対する意識調査、自尊感情調査など）を実施し、報告書にまとめる。

また、オランダFW調査の成果を学内でのシンポジウムの形で外部へ発信した。

オランダFWによる質的調査

事前準備

日程　2014年5月～8月

FWに向けた事前準備として、オランダ教育に関する書籍をゼミ生で輪読し、理解を深めた。それと並行して、オランダ在住の教育研究家、リヒテルズ直子さんとメールでのやり取りを行い、FW内容の詳細を決定した。

FW

日程　2014年9月15日～9月24日

訪問先

・Christelijk Montessorischool
・Thomas More PABO教員養成大学
・StanislasCollege
・Hofstad Lyceum
・Dr.Schaepmanschool

オランダ在住の教育研究家、リヒテルズ直子さんと共に、小学校～大学まで様々なオランダの学校を見学。生徒との交流も行った。また、リヒテルズ直子さんからオランダ教育について講義を受けた。

尾木ゼミ主催オランダシンポジウム

日程　2014年10月22日

オランダFWでの調査結果を発信するため、学内でシンポジウムを開催した。学生の発表だけでなく、オランダからリヒテルズ直子さんをお招きして尾木直樹教授と対談を行って頂いた。学内、学外から約200名の方が参加。

アンケート調査

日程2014年11月～1月

電話にて中学校の先生とアポイントをとり面会。

面会した際にアンケート調査の趣旨や目的を説明し、調査を依頼。

その後郵送等でアンケートを受け取る形をとった。

また、辰沼小学校の校長先生に協力を依頼し、足立区の中学校3校にアンケート調査を行うことができた。

栗ヶ沢中学校	114名
茅ヶ崎西浜中学校	225名
境野中学校	244名
谷中学校、花保中学校、渕江中学校	753名
計	1336名

アンケート調査結果打ち込み

日程　2014年12月～2015年1月

集まったアンケートの結果を、ゼミ生全員でエクセルに打ち込み、集計を行う

Hosei University Repository

学部研究発表会

日程 2015年1月31日

オランダFW、アンケート調査の結果をゼミ生で分析・考察した。結果をまとめたものをパワーポイントを用いて、学部研究発表会において発表する。

報告書作成

日程　2015年2月（予定）

オランダFW、アンケート調査の結果をゼミ生で分析・考察し、報告書として冊子にまとめ、印刷・製本する予定である。

2　結果・意義・所見

企画実施の目的

ユニセフが発表した「先進国における子供の幸福度調査」によると、日本は、子供の幸福度に関する順位は34カ国中6位と上位に位置していた。しかし、孤独度調査によると日本の学生は孤独を感じる指数が高い。34カ国中1位はオランダであるが、同国の子供たちは幸福度が上位に位置すると同時に最も孤独を感じていない。この結果は両国の教育制度に起因するのではないか。

本企画の目的は、自尊感情を軸に日本とオランダの教育を比較し、学力向上以外の部分でも優れた面を持つオランダの教育から学べることを考えることにある。

日本の教育制度が、自尊感情低下を促していることを仮定し、自尊感情を高める教育とはどのようなものなのかをオランダの教育方針を参考にし、考える。

オランダ教育との比較により、日本が学ぶべきことを知ることは、今後日本の教育がどのように変わっていくべきかを考える上で大きな情報であり、財産であると私たちは考える。

企画実施による結果、見込まれる結果

私たちは日本教育の競争主義的、学歴主義的、偏差値主義的な教育に疑問を持った。そのような教育方法では、子どもたちに悪影響があるのではないか。その疑問を持つ中で、日本とは異なる教育を行っているオランダに興味を持った。子どもたちが孤独を感じている割合が最も多い日本と比べて、国際調査でも子どもの幸福度の高さが注目されているオランダ。その違いは教育の違いから来ているのではないかと考え、調査を始めたのである。

オランダへFWに行くことにより、現地で実際にどのような教育が行われているのかを自分たちの目で確認することができた。

オランダの学校では、一斉授業ではなく個別授業で、生徒の一人一人の自主性が尊重され、子どもたちが自由に生き生きと学んでいた。また、学校教育の目的が、子どもたちがこれから進んで行く「社会」へと向けられていた。

オランダの教育制度も日本とは違い特殊で、他人との成績の比較で進路を決定するのではなく、個人の能力に合わせて進路を決定する。

他者と比較せず、子ども一人一人のことを最優先に考えた教育方法が、子どもたちの自尊感情の高さに繋がっていると考えることができる。

日本の教育制度の問題は、過度な他者との競争主義的な教育により、子どもたちが疲弊してしまっていることであるという私たちの仮説は、オランダ教育と比較することでより確かなものとなったと言える。

また、オランダFWでの調査結果を考察し、その結果を発信するために尾木ゼミ主催のシンポジウムを開催した。外部からの来場者も含め約200名の方にご参加いただき、当たり前だと感じていた日本の過度な

Hosei University Repository

競争主義的な教育制度に対する疑問を多くの方に共有することができた。

また、日本の中学生に対して行ったアンケート調査では、以下のような結果を得ることができた。

・自尊感情の点数の平均は30.3点（50点満点）と、そこまで低くはなかったが、孤独を感じるかという質問に対して、全体の30パーセントの生徒がよく感じる、時々感じると答えた。これは2007年にユニセフが行った際の29.8％とほぼ同じ数字であり、以前として日本の子どもたちの孤独度は変化をしていないことが分かった。
・自分の学力の位置を気にしますかという質問に対して、気にすると答えた生徒は全体の82.5％だった。このことから、多くの生徒が他人との比較から出る自分の学力の順位（一般的には偏差値）を気にしていることがわかった。
・勉強は好きですかという質問に対して、はいと答えた割合は全体の5パーセントしかいなかった。また、少しでも学力の高い学校に行きたいと答えた生徒の理由の多くが、「就職に学歴が有利だから」「学歴社会だから」と答えていた。勉強の動機づけの多くが学歴のためであった。

これらの結果から、私たちは日本の教育が学歴を重視しすぎている現状を改めて明らかにすることができた。また、日本の生徒たちの孤独度がいまだに高いままであるということも明らかになった。自尊感情は私たちが当初予想していたよりも高い結果になったが、他人の学力と自分の学力を比較し、他者を気にしている傾向が調査結果から得られたため、自分の価値を他者との比較から見出している傾向にあるのではないかと考察する。他者との比較から来る自尊感情の高さは、条件付きなもののため、いずれは大きく下がってしまう危険性も秘めているのではないかと考える。

また、これらの結果とオランダ教育の視察から、教育制度が子どもたちの自尊感情や孤独度に影響を与えうると考察する。日本とオランダでは教育が大きく異なっていると感じた。そして、その教育を受ける子どもたちの自尊感情や孤独度も大きく異なっている。であるならば、子どもたちが孤独を感じることなく伸び伸びと学ぶ環境がオランダにはあり、日本にはまだないということになる。

公立、私立問わずに学費が無料なことや、学校体系の違いなど、国としての教育への方針や態度も異なるため、そのまま導入することはできない。しかし、個別教育や生徒の自主性の尊重、知識偏重からの脱却など、日本がオランダから学び、実践できることは多くあるように思える。

2015年1月27日の会見で下村文部科学大臣もオランダ教育の視察を行ったと話していた。日本がオランダの教育方法を参考にする日もそう遠くないのではないだろうか。

Hosei University Repository

若者が雇用につまずかないために 第7弾

東西学生就活サミット「就職活動について考える」4人の学生に8つの質問

代表者：筒井ゼミ　3年　上野　萌

1　実施概要

今年で7回目となるNPO法人あったかサポート主催のシンポジウム「若者が雇用につまずかないために」に今年初めての試みとして学生もプレゼンに参加した。具体的には、法政大学筒井美紀ゼミ（佐藤厚ゼミからも一名参加）と同志社大学川口章ゼミの学生が参加した。両ゼミでは半年ほど前から、就職活動についてシンポジウムで他の学生と話し合いたい内容を考え、ゼミ間で連絡を取り合って8つの質問項目に絞った。シンポジウム当日は両ゼミからそれぞれ2名ずつ登壇し、8つの質問に回答する形でプレゼンテーションを行った。これら4人の学生のプレゼンテーションと筒井先生、川口先生のプレゼンテーションを踏まえ、質疑応答が行われた。

当日までの事前準備

2014年6月上旬～7月下旬

ゼミ内での質問項目検討

就職活動に対してどのような不安・疑問を抱えているか（いたか）、川口ゼミの学生にどのようなことを聞いてみたいか、意見を出し合い、質問項目にまとめて川口ゼミに送った。

2014年8月29日【サポート・プログラム助成対象】

NPO法人あったかサポートとの事前打ち合わせ

筒井先生とゼミ生代表者1名がシンポジウムの主催者であるNPO法人あったかサポートの事務所（京都）に出向き、事前打ち合わせを行った。

代表者：3年　坂口美夏子

2014年10月中旬

両ゼミで出された質問項目を擦り合わせ、最終的に、「就職活動のイメージ」や「取り組むにあたっての価値観」、「利用するツール」等に関する8つの項目に絞り込んだ。

2014年11月上旬～当日（12月13日）

筒井ゼミからの登壇者2名は、8つの質問に回答する形でプレゼンテーションを作成し、ゼミ内でのリハーサルや練習を行った。

シンポジウム【サポート・プログラム助成対象】

日程:2014年12月13日（土）～14日（日）

12月13日（土）

シンポジウム当日

時間：13:30～17:30　開催場所：同志社大学今出川キャンパス

筒井先生とゼミ生全員で同志社大学今出川キャンパスにお昼頃到着し、昼食をとった後会場準備を手伝った。

シンポジウム　プログラム

1．開催の宣言

2．6人からの報告

・「若者がピースフルに働き生きていくために―大学生の人間関係と就職活動から考

Hosei University Repository

える―」 筒井先生（法政大学キャリアデザイン学部）
・8つの質問と回答　学生４人（法政大学・同志社大学からそれぞれ２名ずつ登壇）
登壇者（法政大学）：3年　坂口美夏子　4年　遠藤優佑
・「ジェンダーと就活」 川口先生（同志社大学政策学部）

3. 休憩

・登壇者への質問表の提出
・質問表の回収

4. 意見交換会

・会場からの質問紹介
・6人の登壇者からの回答・解説
・会場とのトーク・セッション
・まとめ

5. 閉会

その後、懇親会

シンポジウム後の懇親会では、和やかな雰囲気の中、参加者同士がさらに交流を深めることができた。学生にとっては様々な立場の社会人と話ができる貴重な機会でもあった。また、立命館大学の学生も懇親会に参加していたため、東西の学生間でたくさん意見交換ができ、交流が始まるきっかけとなった。

12月 14日（日）

ゼミ内での反省会

報告書作成への協力

12月 26日にシンポジウム参加者へのアンケートのデータセット作りを完了させ、NPO 法人あったかサポートに送付した。同法人が作成する報告書に掲載する予定である。

2　結果・意義・所見

シンポジウムの翌日のゼミ内での反省会とシンポジウム参加者へのアンケートの集計結果を踏まえ、シンポジウムの成果・意義についてまとめる。さらに、特に今年初実施でメインテーマともなった学生のトーク・セッションを来年以降も続ける場合、今年の反省を踏まえて来年以降改善すべき点について提言する。

成果

各人が様々な視点から就職活動・労働について考えを深めることができた

昨年まではシンポジウム参加者の大半が大学教員や企業関係者、NPO 関係者であり、若者の労働を取り巻く問題について考えることが当の若者とは切り離されたところで行わざるを得なかった。しかし、今年は初めて就職活動を間近に控えた・または終えたばかりの学生が登壇し、事前に両ゼミで意見を出し合って作成した 8つの質問に回答する形でプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションでは、実際に就職活動をする（した）大学生はどのような考えのもとどのような姿勢で就職活動に臨む（臨んだ）のか、学生 4人の生の声が語られた。それぞれに異なるバックグラウンドをもつ関東の学生２人、関西の学生２人の個性溢れる語りから、「四者四様」の労働観が見え、それが各人の就職活動に臨む姿勢にも大きな違いをもたらすことが分かった。

参加者へのアンケートでは、法政大学の学生と同志社大学の学生のプレゼンテーションに対し、回答者 47人中「わかりやすかった」に「よく / まあ当てはまる」と答えた人の割合が 95.7％であり、「意義があった」に「よく / まあ当てはまる」と答えた人の割合が 91.1％であった。自由記述では、「法政大学は「キャリアデザイン科」専攻だけに、

Hosei University Repository

よくまとめてポイントがしっかりしている」とのコメントがあった。

また、筒井先生、川口先生からそれぞれの専門領域を踏まえて現代の労働に関する問題提起やこれから就職活動をする学生とそれを支える学校教育への示唆に富んだアドバイスが述べられた。

このように学生を含め6人の登壇者がそれぞれの立場から述べた就職活動や労働についての考えはシンポジウム参加者にとって非常に興味深いものであり、各人が様々な視点から就職活動や労働について考えを深める機会を得た。

なお、本シンポジウムの様子は京都新聞（12月14日付）にも掲載された（次頁）。

提言

1．シンポジウムの趣旨について

今年のシンポジウムは、学生の参加が初めての試みだったこともあり、趣旨が不明確なまま終わってしまった部分があった。来年以降も学生の参加があるならばなおさら、シンポジウムの趣旨(何が目的なのか)をある程度決定し、それを参加者が共有する必要があると考える。

例年のシンポジウムのテーマは「若者が雇用につまずかないために」である。だとすれば学生が参加する意味は、就職活動をする当の学生たちは就職活動や労働に対しどのような不安を抱えているのか、若者の生の声が大学教員や企業関係者、NPO関係者に届き、それを踏まえて、では学生自身は何をしたらよいのか、大学や企業、NPO側には何ができるのかをともに考えることである。「東西学生トーク・セッション」というテーマを掲げて行われた今回のシンポジウムでも、上記のようにその目的の一部は果たされた。しかし、登壇者以外の学生の意見が少しでも聞かれ、さらに議論が発展するということはなかった。登壇した4人の学生はどちらかというと就職活動に前向きに、積極的に臨める学生だが、実際の大学生の中には就職活動に対して不安のほうが大きく、なかなか前向きに、積極的に臨めない学生も少なくない。会場にいた学生の中には「登壇した学生は就活に前向きに取り組めていいな。こんなに意識の高い学生ばかりじゃないのに。」と思った学生もいたことが、ゼミ内の反省会で分かった。

このような学生の控えめな言葉の中にこそ現代の就職活動の問題点と「若者が雇用につまずかないために」はどうしたらいいのか、その本当の答えがあるかもしれない。もちろん、登壇する学生はある程度就職活動に前向きに取り組んでいて、自分の意見をはっきりと述べられる必要があるため、登壇する学生がいわゆる「意識の高い」学生に偏るのはやむを得ない面もあろう。しかし、そうでない学生の意見、「就職活動が怖い」と感じている会場の学生の本音も踏まえ、もっと多様な意見が議論に反映される機会があれば、就職活動や労働についてより深い問い直しが可能になっただろう。

2．質疑応答について

今年のシンポジウムについて出た反省の多くは、質疑応答（意見交換会）の時間に関するものであった。意見交換会は、休憩時間中に参加者から6人の登壇者への質問票を集め、その中で代表的な3～4つの質問を司会進行が抜粋して読み上げ、登壇者がそれに答えるという形で行われた。提言1で述べたように会場からもっと幅広い意見が出るためには質疑応答の時間が重要であるという考えのもと、来年に向けた改善点を挙げる。

質問票を書く用紙を大きくする

今年の質問票は全員への質問が1枚にま

Hosei University Repository

とめられたもので、一人の登壇者に割くスペースが少なかった。もう少し一人分のスペースを大きくするか、1枚の質問票でなく一人一人に対するメッセージカードの形にするとよいのではないか。

質疑応答の時間そのものを長くとる

今年は時間が足りず、たくさんの意見が出ることを目的とした質問票形式だったにも関わらず登壇者への質問がかなり抜粋されてしまった。質問票の質問がもっと取り上げられるためにも、会場からさらに意見が出るためにも、第一にもっと質疑応答の時間そのものを長くとる必要がある。

会場の形を工夫する

会場から積極的に意見が、それも様々な意見が発信されるためには、意見を言いやすい会場づくりの工夫も必要である。一つの案として、会場の形をロの字にすることが挙げられる。こうすることで、登壇者から遠い人や一般の学生も意見が言いやすくなると考えられる。

関西「面接で話うまい」 東京「交通費安く済む」

大学生、就活で意見交換

「東西サミット」上京で

大学生の就職活動をテーマにした「東西学生就活サミット」が13日、京都市上京区の同志社大今出川キャンパスで開かれた。参加した学生や大学関係者たちは、これから本格化する就職活動について理解を深めた。

就職活動について語り合う同志社大と法政大の3、4年生
（京都市上京区・同志社大今出川キャンパス）

大学生に厳しい就職戦線を乗り切ってもらおうと、京都勤労者学園（中京区）と、NPO法人「あったかサポート」（下京区）が主催した。

同志社大と法政大の3、4年生の4人が「就活のために参考にしたこと」など8項目について意見交換した。両大学の学生からは「東京の学生は（首都圏の就活で）交通費が安くて済む」、「関西の学生は面接で話がうまい」などと語り合った。

就職活動に詳しい同志社大の川口章教授（56）＝政策学＝は「インターンシップやOB訪問をして職場の内情を知ってほしい」とアドバイスした。旅行会社に内定している法政大4年の遠藤優佑さん（22）＝千葉県船橋市＝は「入社後にやりたい仕事をイメージし、受ける会社の社員に直接、社風を聞いたりした」と話した。

（北川裕猛）

Hosei University Repository

未来のための「きっかけづくり」・「動機づけ」を応援したい
～ SIGNAL プロジェクト 2014～

高大連携プロジェクトチーム SIGNAL ／早川俊吾

SIGNALメンバー：青山実生・池田有那・岩間祐斗・遠藤優佑・高橋みのり・辻彩夏・町田貴子・八巻千晴・新井里菜・櫻川博樹・斉藤真璃子・浅野真里奈・上木貴之・大澤義輝・大西珠緒・桐畑誠也・渋谷弥生・野村龍星・保田将太・村上彩夏・吉村友宏・幸喜優里・清水浩貴・提坂菜美・西山珠未・鳴海友理・服部友紀奈・柳杏奈・渡部真帆・渡邊亮

1　実施概要

高大連携プロジェクトチーム SIGNAL は、キャリアデザイン学部生のメンバーを中心に構成されたチームである。「キャリア教育」「高大連携」「ピアサポート」を軸とし、主にワークショップを使ったキャリアサポート活動を、企画運営を通し高校における課題解決を実施している。また、高校生たちとは、発足当初より掲げている「きっかけづくり」・「動機づけ」を常に意識しながら交流を続けている。“ナナメの関係”を活かしながらキャリアデザインをサポートする活動は連携している高校にとっても定期的な年中行事となりつつある。

また 2014年度もキャリアデザイン学部「キャリアサポート事前指導・実習」と、密接に連携をとり活動をさせて頂いた。キャリアサポートアドバイザーの方々にご指導頂くとともに、実習先の確保、実習生（キャリアサポート実習に参加する学部生）との連携など支援をいただき、かつ私たちも経験を生かし、実習生の力になれるよう活動をしている。

【活動内容】

SIGNAL では

- 教育現場（主に高校）に出向いてキャリアデザイン学部生ならではの企画を開催
- 大学に高校生を招きキャンパスツアーやャリアデザイン学部生ならではの企画を開催
- キャリアデザイン学部の新入生への履修相談会のサポート
- キャリアサポート実習との連携
- SIGNAL オリジナルキャリアデザインワークの開発
- 高校での進路ガイダンスのサポート
- キャリアデザイン学部への学生としての貢献を行い、キャリアデザイン学部生ならではの活動を実施している。

【活動報告】

2014年度は、以下のように、年間 14回活動を実施した。

☆実施企画　（計 14回）

○私立浦和学院高校企画　【5月 24日＠法政大学市ヶ谷キャンパス】
特進クラス 2年 2クラス
「大学キャンパスツアー」「RIASEC」「しゃべり場」

○神奈川県立川崎高校定時制企画①　【5月 28日＠川崎高校】
1年 2クラス

Hosei University Repository

「RIASEC」「しゃべり場」
○村田女子高校企画①　【6月10日@村田女子高校】
1年2クラス
「RIASEC」「しゃべり場」
○私立京華高校企画　【6月18日@京華高校】
特進クラス1年普通科2クラス
「6人の人生」「しゃべり場」
○私立千葉黎明高校企画　【7月17日@法政大学市ヶ谷キャンパス】
特進クラス2年希望者
「大学キャンパスツアー」「RIASEC」「しゃべり場」
○都立王子総合高校企画　【9月18日@王子総合高校】
1年6クラス
「RIASEC」「価値観アイランド」
○神奈川県立川崎高校定時制企画②　【9月24日@川崎高校】
1年2クラス
「価値観アイランド」「しゃべり場」
○私立浦和学院高校企画　【10月11日@法政大学市ヶ谷キャンパス】
特進クラス1年2クラス
「大学キャンパスツアー」「RIASEC」「しゃべり場」
○神奈川県立磯子高校キャリアガイダンス【11月7日@磯子高校】
1年8クラス
※宮城ゼミ主催企画後方支援
「価値観ワーク」
○村田女子高校企画②　【11月18日@村田女子高校】
1年普通科2クラス
「RIASEC」「しゃべり場」
○千葉黎明高校企画　【12月3日@千葉黎明高校】
1年4クラス
「RIASEC」「しゃべり場」
○小田原高校定時制企画　【12月5日@小田原高校】
1年2クラス
「多文化企画」「しゃべり場」
○私立村田女子高校企画　【12月12日@法政大学市ヶ谷キャンパス】
1年特進クラス
「3つの自分」「学部ワーク」「しゃべり場」
○足立西高校企画　【12月27日@足立西高校】
1年4クラス
「RIASEC」「しゃべり場」

☆その他活動
- 活動継続やコミュニケーション目的の営業活動（各高校への定期的な訪問・企画前の事前打ち合わせと企画終了後のフィードバック）
- キャリアサポート事前指導 / 実習の授業へのオブザーバー参加
- 学部行事のサポート

2　結果・意義・所見

2014年度は継続メンバーに加え新入生が多く加入をし、組織の規模が昨年度よりも大きくなった。また組織の大部分を下級生が多く占めることになり、昨年度と雰囲気も一新された。

★運営を振り返って

本年度は、上級生が中心となって進めていた企画を下級生に引き継ぐため定期的なミーティングの場を設けるなど、メンバー間のコミュニケーションを積極的にとるように心がけてきた。

また昨年度と同様の企画を行う際、工数を減らしスムーズに企画準備を進めることができるようにするため、企画マニュアルやフォーマットなどを活用した。その他に

Hosei University Repository

も、今まで紙媒体で管理されていた資料やマニュアルなどをデータ化し、ネット上で管理することによって、より効率的に企画準備ができるようになった。

これらにより、ある程度企画の流れを固定化することができ、全員が共通認識を持つようになった。さらに今まで個人の裁量で動いていた部分が、異なるメンバーでも対応可能になり個人の負担が軽減した。企画の流れが固定化されたことで時間に余裕ができ、最も重要な企画の内容検討に時間を割けるような組織体制に変わった。

来年度も、先輩方からの継続と、新たなメンバーによる革新を両立し、よりよい体制を作っていきたい。

☆企画を振り返って

昨年度から引き続き活動をさせて頂いている高校側には、新たな体制になったSIGNALを変わらず受け入れて頂けていることに感謝している。それと同時に、企画のマンネリ化を防ぎ、高校、高校生に毎回新たな気づきを得て頂けるよう努力してきた。

昨年度に引き続き川崎定時制高校との企画では得たものが大きかった。高校生の境遇、コミュニケーションの取り方、反応の仕方など、全日制の高校と印象が異なる部分があり、より高校生一人一人に対応したアプローチの仕方が必要であることを改めて学んだ。限られた時間の中で将来を考えるきっかけづくりをすることは難しい。しかし企画後のアンケートには「これから先のことを考えなければならないと思った」「将来について真剣に考えてみようと思った」などポジティブな声を頂いている。高校の先生からも「子供たちがいきいきとして楽しそうだった。あのような表情は普段の授業では見られない」とお言葉を頂いた。昨年と比較をすると高校生はしだいに心を開いてくれているのか、参加者はわずかであるが増えた。前回のワークの内容や大学生の名前を覚えていてくれたり、企画を楽しみにしてくれていたりする生徒もいる。

この活動をさらに良いものと発展させるには企画の全体の目標だけではなく、高校生一人一人に合わせた目標を立て達成に近づけることが重要であると考える。他者を否定しやすい生徒には「他者の意見を受け入れる」という目標をたて肯定的に受け止めるように促すことなどが考えられる。このような目標を立て、達成に促すためには聞く姿勢に注意しなければならない。したがって来年度からの活動では聴く力やファシリテーション能力の向上に努める。

高校生と大学生という“ナナメ上の関係”にある学生同士で1つの目的・目標を意識して交流していくことで、自分や相手のキャリアについて考え、理解を深められた。そした“教える”という形ではなく、“共に考える”という形で活動を行うことで、前者では気づくことのできないようなことに気づきを得ることに繋がった。また大学生も、ワークのなかでキャリアサポートを実践していくことで、現場の声を聞くことができ見識の幅を広げることができた。今後も、私たちSIGNALメンバーだけでなく、キャリアサポート実習生、ボランティア学生など、多くのキャリアデザイン学部生と協力しながら、“ナナメ上の関係”の強みを活かして継続と革新を両立していくことで、高校側にとっても、私たちにとっても意義のある活動を続けていきたい。

★全体を振り返って

ここまで企画と運営を振り返ってきたが、最後に組織運営の取組による成果と企画実施による成果の両面から今年度の全体の成果を振り返る。

まずは組織運営の取組による成果につい

Hosei University Repository

て。前述のとおり本年度は新入生が多く加入したこと、共有方法の再検討、ミーティングの回数や直接メンバーどうしで顔を合わせる機会を増やすなど、本年度は組織運営の面での取り組みが多くなされた。そうした組織運営面での取り組みは企画自体の内容にも良い影響を与えているように感じられる。これまで上級生が主体となって進めていた企画準備がある程度の流れが固定化できたことで新入生への引継ぎがスムーズにでき、より多くの視点から企画内容の検討が行われ、内容の充実が図れたように感じられる。

次に企画実施による成果について。本年度も昨年度に引き続き、アンケートを実施した企画の振り返りを行ったが、企画直後に測られた数値による定量的な結果だけでなく、企画前と企画終了時の高校生の表情の変化や、自由記述欄に寄せられる企画に対する感想や大学生に対するコメント、企画後の訪問でいただく高校の先生方のお話など、定性的な部分が非常に重要であるように感じられた。

私たちの活動は、“1を10にする”活動ではなく“0を1にする”ことを念頭に掲げて活動を行っている。卒業後の進路についてほとんど考えたことのない高校生に対して、教えるのではなく共に考えるという形で支援活動を行っている。そうした活動の成果は直後の数値だけではなく、上記のような定性的なフィードバックからも大いに測ることが可能であると考える。本年度も、高校の先生方から「企画の後、大学について興味を持った生徒がたくさんいた」というフィードバックをいただいたり、高校生からのコメントの中でも「進路について初めて考えるきっかけになった」といったコメントも多くいただくことができた。また「学年をまたいで法政大学との企画の話がされている」といった継続的に活動を行っていることの成果というのも得ることができた。

組織運営の面や、企画内容の検討、成果測定とそれの振り返りなど、まだまだ検討の余地が多くあるように感じられる。たとえば企画内容について、今までは既存のワークショップや、立ち上げ以来の企画内容を主に実施してきたが、来年度はキャリア教育プログラムの作成を行い、より活動を多角的に行っていくなど活動の幅を広げていきたいと考えている。そうした中でも自分たちの掲げる“ナナメ上からのきっかけづくり”という根本から路線が外れないように原点回帰を忘れずに活動を行っていければと考えている。

最後に、SIGNALの活動は、様々な方の支えにより成り立っている。高校生、高校の先生方、そしてキャリアデザイン学部の先生方、職員の方、キャリアサポート実習生、ボランティアの皆さん、ご支援頂きありがとうございました。そして、活動を熱心に応援し、多方面から支えてくださる山田さんをはじめとするキャリアサポートアドバイザーの皆様、本当にありがとうございます。引き続き、2015年度もSIGNALをよろしくお願いいたします。

Hosei University Repository

飯田市地場産業「伝統工芸品“水引”」の活性化に向けたイベント実施プロジェクト

代表者：酒井ゼミ　4年　田島沙織

1　実施概要

日本の伝統工芸の多くは衰退の道を辿っている。しかし中には、製品の高品質、職人の高技術が世界にも認められ、有益な産業として復活を遂げているものもある。我々は長野県飯田市の地場産業「水引」を題材に、これらを活性化すべくイベントに向けた販売促進、イベントの実施を企画した。

活動日程

2014年6月25日
- 小冊子、動画企画案提出

2014年9月中旬
- 飯田市高校生に向けた小冊子完成
- 水引コンテスト作品募集開始

2014年10月
- 小冊子配布

2014年10月25日
- 「飯田水引結び方教室」開催

2014年12月20日
- 第1回「飯田水引を活用したフラワーデザイン教室」開催

2014年1月17日
- 第2回「飯田水引を活用したフラワーデザイン教室」開催

2014年1月30日
- 飯田水引コンテスト作品募集締め切り

2015年2月中旬
- 飯田水引コンテスト表彰式、講演会開催
- 報告書提出

詳細内容

飯田水引コンテスト実施に向け、飯田市民に水引への理解を深めてもらうために小冊子の制作、動画の配信を企画した。我々はそれらの具体的な案とデザイン等を飯田氏側に提出し、それを基に小冊子を制作した。(動画に関しては飯田市の事情により採用不可)

またワークショップに関しては、結び方教室と第1回フラワーデザイン教室が飯田市側の運営の元行われた。フラワーデザイン教室に関しては、地元のお花屋の御協力の元、テーマ別に2回に分けて開催される。(第1回：正月飾り、第2回：バレンタイン)

一般の市民から水引を使用した作品を募集する飯田水引コンテストは、募集期間は2014年9月中旬から2015年1月30日で、表彰式は2015年2月中旬予定。審査員は飯田水引大使の小椋ケンイチさん他。

企画担当

動画：岡村、田島
小冊子：髙井

報告書提出

ワークショップやコンテストの振り返り、小冊子のリアクション等を飯田市と共にフィードバックをし、報告書としてまとめる。2月下旬に提出予定。

その他

- コンテストに至るまでは、2013年より現地でのヒアリング調査から始まり、報告

Hosei University Repository

会や大学での会議等を重ねてきた。
・コンテスト開催に際し、飯田水引コンテスト実行委員会が発足し、我々もその中に参加している。

2　結果・意義・所見

飯田水引コンテスト実施に伴い、我々は、以下４つの視点で期待できる効果があると考えている。

(1) 飯田市高校生のキャリア支援
・地場産業、伝統工芸品産業の現状を知ることで、高校生の地域問題への意識強化を図れる。また、学生が主体的にイベント企画をしている姿を身近に感じてもらうことで、その後のキャリア形成のきっかけになる。

(2) 飯田水引の認知度向上
・高校生への小冊子配布、水引 PR 動画配信、コンテストの開催、ワークショップの開催、講演会の開催により、幅広い世代の飯田市民に“飯田水引”の存在を浸透させることができる。

(3) 飯田水引製品製造企業の意識改革
・水引コンテストの開催により、高校生の新しい発想に触れ、水引製品製造企業のデザイン力の強化、制作意欲を掻き立てる機会になる。また講演会開催により、客観的に見た水引の現状や可能性を評価して頂き、今後の経営への意識改革を図る。

(4) 学生の経験値の向上
・一連のイベント企画実施により、我々の研究テーマであるマーケティングを学ぶことは勿論のこと、今後のキャリアにおいて役立つで行動力や企画力等を培う機会となる。

現時点では (3)、(4) の効果が表れている。

(3) 飯田水引製品製造企業の意識改革
・飯田市水引製造企業へのヒアリング調査

2013年度に行った水引生産者へのヒアリング調査では、地場産業である「水引」への可能性や新商品開発を積極的に行っている企業（主体的革新派）と現状維持など新商品開発には消極的な姿勢を見せる企業（非主体的保守派）が存在することが判明した。

このことから、「飯田水引コンテスト」開催決定を受け、これらの企業のモチベーションや意識がどう変化したのか電話によるヒアリング調査を行った。以下、ヒアリング調査回答結果である。（表 1）

飯田水引コンテストへの期待や開催決定を受け飯田市や水引組合がどう変化したのかということを中心に具体的にヒアリングを行った。回答結果からわかることは、行

〈表 1：非主体的保守派企業へのヒアリング調査回答結果〉

非主体的保守派へのヒアリング	
企業	回答
d社	水引コンテストで新しい提案や、新しいデザインが生み出されることを期待している。 水引コンテストを成功させるという共通の目標を持つことで、方向性が揃ってきた。
c社	水引コンテスト開催に向けて、何度も打ち合わせをし、意見交換が活発に行われている。 今後は行政とうまく連携しながら、やっていきたい。
e社	行政が金銭的な支援をしてくれたのはとても励みになっている。 以前のように言いたいことを言えない関係ではなく、それぞれが思いを共有できている。

（出典：ヒアリング調査より著者出典）

Hosei University Repository

政と組合が活発的に意見交換をし、これまでよりも関わる時間が増えたということと、行政主催のコンテストで支援を確約されていることで、企業のモチベーションが向上し、また自分たちでは生み出せない一般市民からの新しい発想に期待を持っているということである。

このことから、水引活性化に消極的だった企業が、コンテストを開催する家庭でも意識が改革されていることがわかる。

さらに、飯田水引関係者だけでなく、コンテスト開催に際しメディアの露出も増え、着々と以前とは変化が見えている。

(4) 学生の経験値の向上

・小冊子、動画案

我々は当初、一般市民への広告の為、小冊子と動画の制作を企画していた。しかし、予算や技術的なことから動画案が不可能になってしまった。そのため、小冊子に関しては、我々が絵コンテからデザインまで細かく指定ができ、数ページの小冊子を完成させることができた。我々が、企画したものが形として残り、配布されるということから達成感を味わうことができ、その反面、動画案も完成させたかったという後悔が生まれた。

・スケジュール管理

長野県と東京という距離の問題から、密に連絡を取ることが困難であり、メールや電話、数か月に1回のミーティングのみで企画を進めた。そのため、スケジュールよりも大幅に遅れが生じてしまい、初めに思い描いていた流れと違う流れでコンテストを迎える予定である。これらは、メールであっても密に連絡を取れば解消できた問題であり、また実際に経験したことで、スケジューリングの感覚をつかむことができた。

現時点での結果や効果は以上である。

今後、1月開催予定の「フラワーデザイン教室」、2月中旬開催予定の「飯田水引コンテスト」にて上記の視点からの効果を更に深めていく予定である。

Hosei University Repository

法大生の法大生による法大生のための文化啓蒙

～ZINE の発行による文化系サークルの活動紹介～

代表者：荒川ゼミ　3年　高橋　衛

1　実施概要

今年度、私たち荒川裕子（酒井博基）ゼミは、前年度から引き続き立川をフィールドとして行ってきたプロジェクトと並行し、新たに『法大生の法大生による法大生のための文化啓蒙』をテーマとしたプロジェクトを開始した。

テーマ：『法大生の法大生による法大生のための文化啓蒙』
―法大内の“文化系サークル”に焦点を当てたZINEの製作

…アート・マネジメント論を専攻とする当ゼミでは、身近にある文化・芸術活動の啓蒙を狙いとし、学内の文化系サークルに焦点を当てた冊子(ZINE*)を製作するプロジェクトを立ち上げた。毎週木曜日5限の本ゼミ・6限のサブゼミの時間を使い、企画立案からインタビュー調査・編集作業をすべてゼミ生の手によって行った。

当プロジェクトの準備・製作期間と内容

【準備】

・5月15日
　冊子を作るにあたり、先ずゲストスピーカーとして実際の編集者の方（井上健太郎さん）をお招きして、雑誌を作るということについてお話を伺い、アドバイスを頂いた。

・5月22日～7月3日
　主に木曜5・6限の本・サブゼミの時間を使い、大まかな冊子の構成や特集する具体的なサークルの絞り込み、担当者の決定を行った。

・7月10日
　ゼミ内で最終決定した企画書の発表を行い、二年生をアシスタントとして迎え当プロジェクトを進行させていくことを決定。二年生の振り分けを行った。

・9月18日～10月2日
　各セクションに分かれ、ページ毎の構成やインタビュー項目など細かい点を詰めていった。

・10月9日
　ゼミ全体で、各セクション内での情報を共有した。

この回以降、セクション毎に対象サークルへのインタビュー調査・テキスト作成・編集作業を開始した。

・11月13日
　編集班によりZINE各ページのラフが出来上がった。これに合わせセクション毎にさらなるテキスト編集などの最終調

* ZINE（ジン）とは…自作の文章や絵、写真などをコピー機やプリンターで少量印刷し、ホチキスなどでとじた小冊子。「magazine（雑誌）」が語源とされる。手軽に自分を表現できる手段として1960年代に米国で生まれ、90年代に西海岸を中心に流行。日本国内では近年東京でおベントが開かれたのを契機に、関心を持つ人が広がっている。(2011-10-0 朝日新聞・朝刊・大阪市内・1地方版より)

Hosei University Repository

整を開始。

・11月20日

編集班により最終稿が仕上がった。酒井先生からのチェックとアドバイスを基に各セクションで最終確認を行った。

・11月27日頃

編集班により印刷会社に入稿、ZINE『IESOH!』が出来上がる。

・12月11日

ゼミ内で仕上がりを確認。配布場所など今後の方針を決定する。

担当

【編集班】

高橋果林・李瑛夏

【漫画研究会班】

野川稜馬・橋本沙英

【ピアノの会班】

佐藤美緒・屋代憲人

【カメラ部班】

松野有希子・白井杏奈

【民族音楽研究会班】

高橋衛・北嶋玲太

…編集班がZINE全体のレイアウト等を決め、編集を行い、各班担当者がインタビュー項目の決定・インタビュー調査・テキストの作成をそれぞれ分担して行った。

2　結果・意義・所見

◎企画実施の目的

法政大学には多くの文化系表現サークルがあり、定期的な発表を行っているが、文化系サークルの活動に対する法大生の認知度は非常に低い。もっとも、TwitterやFacebook等の普及により、多くの人がメディアを使って手軽に発信できるようになった昨今、各サークルもそういったツールを用いた情報宣伝を行ってはいるが、そういったSNSはあくまでそのサークル員の知人に対する宣伝にとどまってしまうことが多い。そして結果的に集客はあっても知り合いばかりにとどまっている、というのが現状である。そこで我々酒井（荒川）ゼミは、法政大学の学生として、より身近な対象に向けてリアリティのある情報（文化活動の啓蒙）を発信することに適したZINEを発行することで、法大生が学内外で取り組んでいる文化活動を知り、多くの法大生がその活動に参加、目に触れる機会を増やすことで、法大生に対する文化啓蒙活動を行いたいと考えた。

また、文化系サークルの所属員に対しては、『その人のライフキャリアにおいて、その文化活動がどのような影響を及ぼしているのか』といった内容にも触れ、キャリアデザイン的な視点からのアプローチも行った。

◎ ZINE「IESOH!」

―“文化系サークルはまだ本気出してないだけ”の内容・配布方法について

まず、このZINEの内容についてだが、「文化系サークルはまだ本気を出していないだけ」というテーマを切り口に、文化系サークルが最も力を入れる部分に焦点を当てた。

これは、“文化系サークルの活動は知らないが、文化活動に対する意識は比較的高い”という多くの法大生に、学内のサークルの「本気」の場（＝身近なところにある文化活動）を知ってもらうことで、少しでも興味を持ってもらい、オーディエンスとして足を運んでもらうという狙いがあったためである。

対象としたサークルは、漫画研究会・ピアノの会・カメラ部・民族音楽研究会である。以上のサークルの代表者数名に、普段の活動の様子や、部室の様子、“本気”の活動時（主に作品の展示やライブなど普段の成果を

Hosei University Repository

披露する場面）の様子についてインタビュー調査を行った。

タイトルの『IESOH!』は、HOSEI（法政）という言葉を逆から並べたものである。これには、法政大学という勉学に励む場所において行われている“文化活動”という“法政大学をまた別の角度からみてもらいたい、という意味を込めた。

具体的な配布方法としては、市ヶ谷キャンパスの学生センター前、学生ホール前にそれぞれ設置されているラックにこのZINEを置き、自由に閲覧、入手できるようにし、なるべく多くの学生の目に触れるようにする。

◎結果と見込める成果

今回のこのZINEの発行部数は200部である。

文化系サークルの活動について知らない200人の法大生に、少しでも興味を持ってこの ZINEを手に取ってもらい、その200人それぞれによって、さらに文化系サークルの活動について知らない10人にこのZINEの内容を届けてもらえれば、合計で2000人の法大生に対して文化啓蒙が行われることになる。

2000人という数字は、市ヶ谷キャンパスの総生徒数である約1万5千人から見ればまだまだ少数である。しかし今年度作成したこの『IESOH!』は、このZINEの発行によりどの程度効果があるかを実証するためのいわば「0号」である。

発行後、創刊号においてその活動を紹介したサークルに対して、具体的な成果（展示会やライブにおける集客率や内容）について再度調査を行う。そのフィードバックを行いつつ、また新たな文化系サークルを対象としてインタビュー調査を行い、新入生入学後の4月以降、より精度を上げた状態で“創刊号”を発行する予定である。その際の発行部数は500部を予定しており、上記と同じ計算なら計5000人、全校生徒の約3分の1の数の法大生に対して文化啓蒙を行うことができる。

配布場所についても、学生ホール前のラックやボアソナードタワー前のラックなど以外にも検討を行い、より多くの法大生にこのZINEを手にとってもらえるよう工夫を行っていきたいと考えている。

Hosei University Repository

デジタル単語帳認知度向上プロジェクト

代表者：酒井ゼミ　3年　富澤　愛

1　実施概要

現状として売れていないCASIOの製品「デジタル単語帳」を題材に、課題抽出のためのアンケート調査、課題解決のためのイベント開催、webページの作成を通じてマーケティングを行った。

「デジタル単語帳」は中学生・高校生をターゲットにした商品で、紙の英単語帳のデジタル版である。デジタル単語帳自体に英単語は1900個ほど入っており、指定の電子辞書と接続することで英単語を入れることが可能である。価格は5千円程度になっている。

【企画内容】

課題抽出の段階でアンケート調査を行い、課題を解決するための方法としてイベントの実施とwebページの作成の2種類を行った。

「アンケート調査」

デジタル単語帳が売れていない原因を探るためにアンケート調査を実施した。東京都と千葉県の高校各1校ずつ計87名の生徒を対象に紙媒体で用紙を配り、アンケートに回答してもらった。仮説を作ったうえでアンケート項目を作成し、アンケート結果から課題の抽出を行った。

「イベント実施」

三井アウトレットパーク幕張の催事スペースを使い、電子辞書とデジタル単語帳を用いたイベントを実施した。小・中学生とその親を対象として親子参加イベントにした。電子辞書を使って解く問題を子ども用と大人用とを作り、解いてもらい電子辞書に触れてもらうとともにデジタル単語帳にも触れてもらった。実際に使った人の生の声を得るために問題を解いた後にアンケートも行った。

「webページ作成」

CASIO公式オンラインショッピングサイト「e-casio」にて、法政大学酒井ゼミのページを作り、そこでデジタル単語帳の魅力を大学生目線で伝えていく。

【事前会議】

「場所」

カシオマーケティングアドバンス本社

「日程」

第1回：2014年4月16日
第2回：2014年6月6日
第3回：2014年7月25日
第4回：2014年9月17日
第5回：2014年10月8日
第6回：2014年10月24日
第7回：2014年11月25日

「会議内容」

プロジェクトの方向性詰め、アンケート結果報告、企画決め

【事前調査】

「場所」

三井アウトレットパーク幕張

「日程」

Hosei University Repository

2014年9月26日(イベント実施場所下見)
2014年11月16日（カシオマーケティングアドバンス株式会社のイベント見学）
「内容」
企画実施場所の下見による会場の大きさや雰囲気の確認、他のイベント見学によるイベントの雰囲気やお客さんの年齢層の確認

【事前準備】
「場所」
三井アウトレットパーク幕張
「日程」
2014年12月5日
「内容」
会場設営

【イベント実施】
「場所」
三井アウトレットパーク幕張
「日程」
2014年12月6日、7日

2　結果・意義・所見

【高校生へのデジタル単語帳アンケート結果】
- 高校生はデジタル単語帳の認知度が低い。(認知度10%)
- 約半数がアプリの単語帳よりデジタル単語帳を使いたい。
- 約60%が紙の単語帳よりデジタル単語帳を使いたい。
- デジタル単語帳を欲しい人は43%。
- デジタル単語帳をもらえたら使う人は79%。
- デジタル単語帳の買いたい価格は3千円以下の値段で97%を占めた。

【アンケートからの課題抽出】
- デジタル単語帳の魅力はあるが、認知度がとても低いことが浮き彫りになった。
  ⇒認知をしなくては製品を買うまでの行動に繋がらないため、認知度を上げる必要性が大いにある。
- 学生の買いたい価格帯は販売価格より低いため、もらえたら使う人は多い結果になっている。
  ⇒学生自身が買いたいと思わせることも必要であるが、デジタル単語帳の価格を考えると親が買うことになると思われるので親に対してのアプローチも必要である。

★学生とその親に対する認知度向上のアプローチが必要である！

【イベント詳細】
「日時」
2014年12月6日、7日
10：00～18：00
「場所」
三井アウトレットパーク幕張
「目標」（アンケート回収）
1日　50組
合計　100組
「結果」
1日目　21組
2日目　68組
合計　89組

アンケートの例を挙げると電子辞書に関しては、
「非常に便利で使いやすかった」
「タッチパネルや動画が見ることができて驚いた」
「子供が楽しんで勉強できそうだった」
といったように、電子辞書が非常に便利であるという意見や、現代の電子辞書の機能性に関して驚いている感想が多かった。また子供が楽しんでいる様子を見て、勉強を楽しんでできそうというような前向きな意

Hosei University Repository

見も多かった。

デジタル単語帳に関しては

「転送できる機能に驚いた」

「オフラインでも使えるので便利」

「手軽に持ち運びやすそうだった」

「とても便利で使いやすく1台あったらいいなあと思いました」

といったように、機能性に関して便利という回答や、大きさ的にも持ち運びやすそうといった意見が多かった。

アンケートを見てもわかるとおり、機能性に関しては十分であるが、使ってもらった方からは知らなかった、驚いたという意見が多く、使ってみて初めて魅力が伝わるという現状であった。

結果として今回のイベントを通じて認知度がまだまだ足りていないことが判明した。

【提言】

企画全体を通じて浮き彫りになった認知度が低いという課題点を解決するには、 より効率的なPR活動が必要である。それは子供と親で方法を分けるべきであると私たちは考える。

「子供」

現代の子供たちが最も目を通す媒体はインターネットである。

そのインターネットを使ったPR活動を行うことにより、より子供たちに魅力を発信できると考える。

現在カシオ計算機株式会社さんが運営している「e-casio」というホームページを使ってPR活動を行い、検証中である。

「親」

今回のイベントのアンケート結果からわかるように実際に体験してもらうことにより、製品の良さを伝えていくPR活動が効率的であると考える。

また、今回のイベント会場のようなショッピングモールでは家族で訪れていた方が多いため、子供が扱っている姿を親に見せることが出来るとともに親にも実際に体験してもらい魅力を伝えられ認知度を上げる場を提供できる。

Hosei University Repository

学校支援ボランティア

代表者：遠藤ゼミ　3年　堀　裕佳

1　実施概要

離島である情島に住む、養護施設の子どもたちの通う小・中学校へ行き、部活動支援や、学習支援を行なう。また、離島で生活する子どもたちのロールモデルとなり、キャリアデザインのきっかけに繋がるキャリア支援を行う企画である。企画実施後、参加者全員が報告書を書き、論文集を作成し、情島小中学校へ送付する。

準備段階

7月17日、24日

・ボランティア活動を行う参加者の各担当案、レクリエーションの企画や物品購入案についての話し合いを行った。

企画参加者

・法政大学から当企画参加者は4年生3名、3年生8名、教員を含んだ12名である。
・参加者は法政大学キャリアデザイン学部遠藤ゼミに所属する者が大半である。

実施概要

・ボランティア実施日は平成26年9月3日～5日の3日間。
・山口県大島郡周防大島町情島小・中学校への移動には公共のフェリーを用いる。
・ボランティア実施後に作成する報告書の参考資料として、企画実施中は子どもたちや先生方の様子、言動のメモをとった。
・授業見学のほかに、レクリエーションの時間をいただいており、9月5日に行われた。

9月3日

・お昼過ぎに情島小・中学校に到着し、午後の授業を見学した。
・6時間目の避難訓練に参加し、実際に車椅子を体験する子どもたちの補助を行った。
・地域住人の方々と合同の避難訓練であったため、子どもたちと共に公民館に移動し島の地震対策についてのお話を伺いつつ、子どもたちの補助と観察を行った。
・授業終了後は、部活に参加するなど各自子どもたちと交流を図る。
・宿泊施設に戻り、当日の子どもたちの様子やふれあい方、ボランティア実施における反省点とその改善案の共有を行い、翌日の行動の確認を行った。

9月4日

・授業を見学しつつ子どもたちの観察を行った。
・休み時間や放課後に遊びや部活を通して子どもたちと触れ合った。
・宿泊施設に戻り、前日と同様に当日の出来事、反省とその改善策の共有を行った。また、翌日に行うレクリエーションの準備、確認（天候等の考慮、レクリエーションの担当者の割り振り等）を行った。

9月5日

・午前中は授業の見学を行い、午後に約2時間レクリエーションを行った。実施レクリエーションはドロケイとドッジボー

Hosei University Repository

ルである。運動が苦手な子どもに配慮して、補助の大学生を準備し、行った。
・情島小・中学校の先生方、子どもたちに挨拶して空港へ向かった。
・21時頃羽田空港解散し、各自帰路へ。

報告書作成

・参加者が今回のボランティア活動についての報告書として、原則全員が各自論文を作成し、論文集を作成する。
・報告書の内容としては、参加者が企画実施につき、実際に体験した事例をもとに、各々テーマを設定し、考察を行う。
・企画実施中にメモした子どもたちの様子や行動を基に事例として描きだし、さらにその事例についての考察を行った。報告書は一人当たり15枚程度（400字づめ原稿用紙換算）を目安に作成。事例の書き方、観点の置き方、テーマの設定、考察の内容において教員の指導を受けた。平均して一人あたり7回の添削を行い、報告書を完成させた。
・報告書では、身体接触による距離感の変化、子どもの表情の変化や言動から読み取る子どもの内面、子どもがついたうその意味など、子どもとのふれあいにおいて各自が得られた知見や感じた疑問をテーマにした。
・報告書は現在まとめている段階であり、1月末に完成予定である。
・2月に再度情島を訪問し、報告書の提出と、教員との研修会を測る。

2　結果・意義・所見

報告書では様々なテーマが取り上げられた。例として「しっかり者だと思われることが子どもの行動に制限をかけるのか」「なぜ嘘をついたのか」「大学生に対する甘えの理由」「積極性の程度に違いを生む理由とは」等。

こうしたテーマは、境遇の全く違う子どもたちとボランティアが出会い、3日間という短い期間ではあるが、支援を通してふれあう中で、子どもたちの様々な感情や葛藤への気付きから取り上げられた。

ボランティアを行う前は、離島の養護施設で、厳しい規律の下生活している子どもたちを、私たちが普段関わる様な普通の小中学校に通う子どもたちよりも無口で消極的なのではないかと危惧していた。しかし、企画で訪れた情島の子どもたちは非常に活発で、積極的に話し、よく遊ぶ子どもたちであった。初対面である私たちにも臆せず、多くの子どもたちが遊びや部活に誘い、積極的にふれあいを求める様子であった。しかし、共に時間を過ごしていると、活発な様子を見せていた多くの子どもたちからその明るさに隠された様々な複雑な感情や葛藤が見えてくる。

本来部外者である私たちが子どもたちに安心して接してもらうためには、受け入れる姿勢が必要であると考える。情島は人口も少なく、普段関わる大人は学校の先生や施設の人がほとんどである。先生や施設の職員は当然のように全ての子どもたちに平等に接しなければならない。こうした環境であるため、普段の生活では子どもたちにとって甘えられる存在は少なく、甘えを隠している子どもも少なくない。

ボランティアとして学校生活に密着して支援を行う私たちは、子どもたちからの遊びや部活といった積極的な誘いには好意的に応じる。そうした関わりの中で、子どもたちはボランティアの人は自分を受け入れてくれる存在だと認識し、普段隠している甘えを少し見せてくれることもある。

そうした甘えは必ずしも直接的なものではないというのが今回ボランティアを通して共有された事柄である。このボランティ

Hosei University Repository

アを通して確認された子どもたちの甘えの表現を実際にあった事例をもとに紹介し、考察したい。

・事例１【9/4　2時間目国語】

「ひろきー！おはよう！」声をかける前から私の姿を見て、気づいていたはずなのに、俯いて反応しない。しかし顔をよく見ると、口元は少し緩んでいて、はにかんでいるようだった。「なんで無視するのー？挨拶かえしてよー！」とふざけた口調で言うと、少し黙ったあとに「おはよ！」と、思いきったように元気よく挨拶をかえしてくれたが、目線は下を向いたままだ。

授業が始まると、途中で先生に「扇風機がついていません」と指摘し、先生につける許可をもらった。そこで後ろを振り返り、大学生を見て少し笑ったが席を立とうとしない。それを見た先生に「(大学生に) 後ろから見られているとお行儀よくなるね」、「いつもは聞かないで勝手につけに行くのにね」と笑われ、少し笑いながら下を向いてゆっくり扇風機をつけに行く。先生に普段との態度の違いを指摘され、照れているようだった。

・事例２【最終日　別れの挨拶】

最後に学校の外で子どもたちが一列に並び、順に大学生と言葉を交わし、握手をしていた。ひろき君の前に並んでいた小学生の女の子と握手を交わし、抱き合って別れを惜しんだ後に、ひろき君とお別れをする。「ずっとここにおったらええ」と冗談のように明るく言うが、表情は固く俯いている。「ちょっとしか居れなかったけど楽しかったね！」とひろき君と同じように明るく返答すると、小さく頷いた。反応が小さく、表情も固いため、「ひろきも楽しかった？」と、わざと声を暗くして不安そうに聞くと、私の顔をしっかり見ながら大きく頷いて、笑顔で「楽しかった！」と答えてくれた。そこで、「また来るから、またたくさん話してね？」と、私も笑顔で言うと、「次はいつ会えるん？来月？冬？」と楽しそうに、いつものいたずらっ子な笑顔で尋ねてくる。「来れるとしたら次は春かなー！来れるか分からないけどねー！」と私もわざと意地悪な顔をして見せると、「春って来年？・・・絶対来てね！」とまた少し俯いた後で私の顔を見て元気よく言った。いよいよ別れる、というときに、前に小学生の女の子と抱き合っていたのを見ていたらしく、小学生の女の子と同じように両腕を広げて見せた。「ん！」といたずらっ子な笑みを浮かべてハグを要求してきたため、「しませーん！」と両腕をばってんにし、わざと意地悪な顔をしながら拒むと、楽しそうに笑って「じゃーな！」と手を振った。

・考察

事例１から、先生に普段との違いを指摘されたことへの、ひろき君の反応を考察する。普段と違う様子を指摘され、恥ずかしそうに笑いながらも、どことなく嬉しそうな表情から、先生にかまってもらいたいという、甘えたい気持ちが伝わってくる。また、挨拶をしても俯いて反応しない、といった行動は、一見、中学生の男の子にありがちな、ただの反抗や恥ずかしさの表れのようにも思われる。しかしひろき君の表情に注目すると、口元は笑みを浮かべていて、面倒くさそうにしながらも、最終的には表情は柔らかく、きちんと返事をする。これは、あえてすぐには返事をせずに自分にもっと関心を持って欲しい、という甘えのようにも感じられる。こうした様子は授業中に積極的に自分から発言する様子からは感じられず、大学生に対しての特有の甘えであるように思える。また事例２からも寂しさを隠さずに伝えてくる様子や、最後に小学生

Hosei University Repository

と同じように抱きしめてほしいという感情を、冗談を装いながらも伝えてきたことから、ひろき君の大学生への甘えが読み取れる。ひろき君の先生へ対する甘えと、大学生に対しての甘えでは、それぞれ違いがある。前者は先生やクラスの友だちとの場面、つまり大学生がほとんど介入していない普段のひろき君の姿であり、その甘えの姿勢は、いつもと違う点を指摘されたことに対し、嬉しそうにしていることから、受動的であることが分かる。他方、後者は大学生と接するひろき君の姿であり、抱きしめて欲しいといった甘えを素直に伝えてくる、というように能動的な姿勢である。このように、ひろき君には2種類の甘えがあることが確認できた。

今回の企画では、こうしたボランティアひとりひとりの気付きを言語化してまとめ、学校に報告することで、子どもとの関わりによる自己発見の道筋を明らかにできたことが、大きな意義であるといえる。

Hosei University Repository

計量分析に基づくキャリア研究および会計研究

代表者：中野ゼミ　本田恵理

1　実施概要

1．春学期における活動

本研究課題を遂行するため、まず春学期には以下の活動を行った。

1-1．研究活動

(1) 基礎的文献および先行研究の輪読

広く研究の基礎を固めるため、キャリア研究および会計研究に関する基礎的文献を輪読した。具体的に前者については、大藪千穂『生活経済学』(放送大学教育振興会、2012年)、宮本みち子・岩上真珠『リスク社会のライフデザイン変わりゆく家族をみすえて―』(放送大学教育振興会、2012年)、また後者については齋藤正章・阿部圭司『ファイナンス入門』(放送大学教育振興会、2012年）を取り上げた。

(2) 統計パッケージ（Stata）の使い方および統計的手法の学習

計量分析に基づく研究を行うため、統計に関する知識を深め、同時に統計パッケージ（Stata）の使い方を学んだ。本研究活動で使用する統計パッケージ Stata は、今年度に新しくバージョンアップされた。そのため、2014年度学生活動サポート・プログラムから得た助成金を使用し購入した。新しくバージョンアップされた Stata　ver.13により、統計的手法の幅が増え、本ゼミの研究水準を上げることができた。

(3) グループ研究

グループ別に研究テーマを設定し、先行研究のサーベイを中心に論点を整理を行うとともに、下記の発表会において、それらの成果を報告した。

1-2．他大学との発表会

●高崎経済大学・平井ゼミとの発表会
日時：7月 19日（土）13: 00～ 17: 00
場所：法政大学外濠校舎 S407
参加大学：法政大学（中野ゼミ)、
　　高崎経済大学（平井ゼミ）

3年
「女性の結婚と労働に関する研究」(池部珠季・田中力・内藤優花・見谷俊・渡邊菜月)
「予想利益の意義と論点」(稲垣素美・小林侑喜・齋藤紀怜・本田恵理)
「セグメント情報の有用性」(埴原大介・佐藤知世)

4年
「若年者のキャリア形成の決定要因―外的要因と内的要因の分析―」(大森るりか・佐藤潤一・中島永美子・中庭淳平)
「少数株主持ち分に関する実証研究」(波多野有香・兵藤妃冴)

2．秋学期における活動

上記の春学期における研究を踏まえて、後記はグループ別に、計量的な実証研究を中心に実施した。

2-1．研究活動

(1) 基礎的文献の輪読

春学期に扱った文献のうち、『ファイナン

Hosei University Repository

ス入門』の輪読を引き続き行い、それらの習得を図った。

(2) 先行研究の整理、検討

各グループ別に、研究テーマに関連する先行研究の整理、検討を行った。

(3) 計量的な実証研究の実施

とくに11月以降は、検証すべき仮説の検証に使用する、データを収集し、それらを統計的に分析し、検証仮説が支持されるかどうかの検証を入念に行った。また、以下のとおり、2泊3日の研究合宿を実施し、研究を集中的に実施し、当該合宿を通じて、研究主題の解明を相当進展させることができた。

＜研究合宿の実施＞

●日程：11月28日～30日

●場所：法政大学富士セミナーハウス

●参加者：3年生、4年生全員

その後、3年生および4年生の実質的な研究は12月下旬には終了し、以下のとおり、他大学の発表会等の機会において報告し、議論を深めた。

2-2. 他大学等との発表会

●＜首都大学東京・細海ゼミとの発表会＞

日時：12月26日（金）13: 30～16: 30

場所：首都大学東京国際交流会館

参加大学：法政大学（中野ゼミ）、
首都大学東京（細海ゼミ）

3年

「結婚と生活満足度の決定要因」（田中力・内藤優花・見谷俊）

「セグメント会計」（佐藤知世・埴原大介）

「予想精度と利益調整行動」（稲垣素美・齋藤紀玲・小林侑喜・池部珠季・本田恵理）

4年

「若年者のキャリア形成の決定要因―外的要因と内的要因の分析―」
（大森るりか・佐藤潤一・中島永美子・中庭淳平）

「少数株主持ち分に関する実証研究」（波多野有香・兵藤妃冴）

「東日本大震災における適時開示の有用性に関する実証研究」（金子美香・高田悠介）

以上の研究活動を経て、すべての研究チームが一定の研究成果を残した。それらの研究成果は、次の機会にて発表した。

＜後期のゼミ合同発表会＞

本発表会では、キャリア研究から1チーム、会計研究から3チームが発表した。それらの発表に対しては、本発表会の教員および学生と議論を行い、研究課題等を浮き彫りにすることができた。

なお、本研究の成果は、法政大学キャリアデザイン学部内部の「学生研究発表会」（2015年1月31日）においても発表する予定である。

2 結果・意義・所見

本企画では、キャリア研究または会計研究に関連する主題のうち、ゼミ生が興味を持つテーマを研究し、いまだ解明されていない社会現象について研究を進めた。以下、本企画に基づく主な研究成果を紹介する。

●「結婚と生活満足度の決定要因」（田中力・内藤優花・見谷俊）

本研究は、若年者のキャリア形成の重要な要因として、(1) 結婚の決定要因、および、(2) 生活満足度の規定要因について、パネル・データを用いて計量的に解明した。主な発見事項は、次のとおりである。

まず、(1) 結婚の決定要因については、収入等の経済的要因以外に、コミュニケー

Hosei University Repository

ション能力の有無や、とくに女性は人柄が結婚の有無に影響を与えていることが判明した。また、(2) 生活満足度の規定要因については、男性は仕事や家庭によりかかって生活満足度を得ていることが分かった。

●「セグメント会計」(佐藤知世・埴原大介)

上場企業は、貸借対照表、損益計算書およびキャッシュ・フロー計算書の他に、セグメント情報を公表している。近年、日本ではセグメント情報に関する会計基準が変更され、その有用性が向上したのかどうかが注目されている。本研究は、その一環として、日本企業が、従来、どのような部門(セグメント)の業績を隠ぺいしていたか否かを検証することも目的としている。

その結果、米国企業のように、利益率が高い(低い)セグメントを隠ぺいしていたという、特定の傾向は観察されなかった。このことは、日本企業は米国企業とは異なる会計行動をとっている可能性が示唆しており、一層、研究を深める必要がある。

●「経営者業績予想精度と利益調整行動」(稲垣素美・齋藤紀玲・小林侑喜・池部珠季・本田恵理)

決算情報にはその年度の実績値と来年度の予想値が同時に公表される。そのどちらがより、投資家にとって有用性のある情報かどうかは極めて重要な論点である。その中でも、経営者の業績予想の精度と利益調整行動においてはより重要な論点であるとし、解明する必要があると考えられる。まず、業績予想精度においては、業績変動の著しい業種では、予想精度が低下するなど企業の財務特性が影響を及ぼしているのではないかと考え、業種予想の精度と財務特性の関係性を明らかにする。

経営者予想の誤差に影響を及ぼしている要因を、単変量分析と多変量分析を用いて検証した結果、業績予想に影響を与える財務特性はROA・ROE・ROSなど売上高変動や費用構造変動、売上高成長率による費用変動、海外売上高比率つまり為替変動、企業規模の大小が影響を及ぼしていることが明らかになった。

続いて、利益調整行動の論点では、裁量的発生高と非裁量的発生高から成る会計発生高について、経営者が意図的に計上している部分である裁量的発生高に着目し、経営者は予想値に近づけるために利益調整行動している、という大きな仮説のもと研究を行った。

分析方法は裁量的発生高を予想誤差のレベル別にグループ分けし、グループ同士の差の平均差検定を行った。結果、予想誤差がプラスのとき裁量的発生高はマイナスに、予想誤差がマイナスのとき裁量的発生高はプラスになり、誤差小グループより誤差大グループがより大きな裁量的発生高を計上していることが判明した。つまり、極端な誤差のある企業は利益調整せざるを得ない可能性、予想修正など行って予想に近づけている可能性を示している。

●少数株主持ち分に関する実証研究(波多野有香・兵藤妃冴)

少数株主持分はここ20年余りの間に、国際会計基準へのコンバージェンスに伴い、負債の部から、負債の部と資本の部の中間へ、そして純資産の部へ、その表示箇所の変更がたびたび行われてきた。このような背景から、少数株主持分とは資本なのか負債なのかを明らかにすべく、各研究者たちによって議論が繰り返されてきた。しかしながら、未だに統一的な結果は得られていない。さらには、少数株主持分そのものについての実態を詳細に明らかにした論文も未だに存在しない。本研究では、日本における少数株主持分の実態を明らかにした上

Hosei University Repository

で、少数株主持分の価値関連性について実証的に考察した。

まず、実態分析では約20年分のデータを用いて、年代と業種の2つの観点から日本における少数株主持分の実態を分析した。時系列では、少数株主持分はこの20年で増加傾向にあること、少数株主持分の保有率の二極化が進んでいることが、また、業種間での比較では、近年の増加傾向は業種を超えたものであるが、少数株主持分を多く保有する層に関しては業種間の差がある、ということが観察された。

次に、実証分析では、回帰分析により少数株主持分と株価の価値関連性を分析した。連結基礎概念の観点から、少数株主持分の資本性を明らかにしようというものである。結果、少数株主持分を多く持つ、少数株主持分の重要性が高い企業群ほど、そして近年になるほど、経済的単一体説支持の傾向が、顕著に見られることが分かった。経済的単一体説支持という結果はつまり、少数株主持分の資本性を市場が認めているということを意味する。

これら結果は、近年の国際会計基準へのコンバージェンスに伴う日本の会計基準の変更を肯定するものである。さらに、近年の少数株主持分の増加傾向から、今後より一層その動きを速める必要があることを示唆していると考えられる。

Hosei University Repository

文化探求プロジェクト

代表者：坂本ゼミ　3年　鈴木香央里

1　実施概要

事前準備 11/18, 25, 12/1

墨田区立梅若小学校に行き、小学生のカンボジアへの理解を深める。初めにソティーブン先生によるカンボジアについての授業を行なった。その後、クメール語の学習も行なった。

5年生２クラスを対象とし、1クラス８班に分けて、班ごとにカンボジアの小学生に向けてのビデオレターの作成を行う。クメール語、日本語、英語を用いた自己紹介と、各班カンボジアの小学生に伝えたい内容と質問を自ら構成建てて作成する。テーマは、様々出来、日本の観光名所や自分たちの暮らす地域、漫画、日本の文化などである。

テーマを決めた後、大学生の補助の下、絵コンテ作成を行う。言語の通じない相手に対して、どうすれば言語に頼りすぎることなく、うまくコミュニケーションを取ることが出来るかを考える。また、カメラワークについても学習を行い、バランスのとれた構図を考えさせる。

撮影は小学生が全ておこない、「相手にわかりやすいように」をコンセプトに、各自絵コンテに沿った撮影を行なった。その後の編集も小学生らが班ごとに進めた。編集作業中に何回も発表会を行い、その都度クラスメイトからフィードバックをもらい、検討しながら編集を進めていた。

メコン大学の学生との協同プロジェクト。
実施日時　12/22～12/29

12/22

メコン大学の学生たちと顔を合わせ、坂本先生によるメディアリテラシーについての講義を行う。午後、班に分かれてコミュニケーションを図る。その後、班ごとにテーマを決めてそれぞれカンボジアの文化探求を行う。

1班　カンボジアの食文化
2班　メコン大学生の一日の生活
3班　カンボジアの生活文化と伝統衣装

午後は引き続き班活動を行う。1班はカンボジアに出店したイオンモールに行き、日本とカンボジアの食文化の比較を行なった。2班はメコン大生のアルバイト先を見学し、その様子を撮影した。そこで出会った日本人学生にもカンボジア人の仕事に対する考え方等、お話を伺った。3班はカンボジアの生活を覗くためにまず美容院に行き、カンボジアでの女性の髪を切る場面の撮影許可を頂き、一部始終を撮影した。

また、日本に残る坂本ゼミ2年生とメコン大生がスカイプ交流を行った。

12/23

1班　午前中はカンボジアの伝統料理ムンバチョの調理のため、市場に買い出しに向かう。市場は狭く地面は濡れており、日本のものとの違いを痛感した。その後、学校に戻り、メコン大の班員が調理し、みんなに振舞ってくれた。午後はカンボジアの屋台料理を食べ歩いた。チョプチャやバナナのスイーツなどを食べた。2班はメコン大生の放課後の様子を撮影すべく、王宮やイオ

Hosei University Repository

ンモールに出向いた。そこで彼ら彼女らの実際の生活の様子を撮影した。夕方に王宮近くの広場で行われている市民の日本で言うラジオ体操のようなものを見学した。合間にカンボジアで人気のおやつなどをメコン大生と共に食した。3班は、ワットプノム寺院にトゥクトゥクで赴き、そこでカンボジア特有の作法を学んだ。その寺院から徒歩で川に沿って王宮に向かった。王宮では、向かいの広場でメコン大の学生が売り子から購入してきてくれた豆や果物を食した。

12/24

MIS（小学校）に赴いた。小学校の子供たちは日本語がわからないため、メコン大学の学生が何人か同行していただいた。初めに日本の梅若小学校で制作したビデオレターを上映。子供たちの日本への興味をあおった。その後、いくつかの班に分かれ、MIS の子供たちと共に梅若小学校生徒へ向けた返信を制作した。

12/25

引き続きメコン大学の学生と各班活動を行う。

ナレーションはクメール語、字幕は日本語、という条件であったため、メコン大学の学生にナレーションを入れてもらった。撮影の終わっている班がほとんどで、発表会の時間まで坂本ゼミの学生は編集に打ち込んでいた。

16時から、それぞれの班で制作した映像作品の発表、説明、フィードバックを行った。1班から順に発表していき、作品のテーマや見所の説明、大変だった点や工夫した部分をプレゼンテーションした。最後に坂本教授からの全体へのフィードバックを頂き、メコン大学との合同映像制作実習は終幕した。

この日の夜は、実習の慰労会と交流会を兼ねて、大学の学食を貸しきっての大きなパーティーが催された。

2　結果・意義・所見

①メコン大生との共同映像制作

それぞれの班のテーマは違うが、カンボジアの生活文化をそれぞれ触れ、撮影することでカンボジアの現状や課題が見えてくるという結果となった。

まず、カンボジアは発展途上国ということもあり、これから著しく成長していく国でもあるが、その一方貧富の差が広がってきている。私達は今回、比較的裕福な層にいるメコン大の学生と協力して制作を行ったのだが、撮影中大人だけでなく子供達が果物やお土産物、鳩の餌などを売りに来て、悲痛な顔で「1dollar」と話しかけてくる光景を1日に何度も見かけた。売り子ならまだしも、私達に手の平を見せ、お金をせがむ子供もいた。また、カンボジアでは貧困による女性問題も起きている。例えば売春問題である。働くより売春の方が稼ぐことができる女性は望んで売春を行ってしまう。売春へと走る女性を助け、縫物工場に働く場を提供するという活動も行われているそうだが、賃金が低く、それだけでは生活していけない為再び売春行為へと走る女性も多い。その一方、メコン大生はほとんどが英語を話せ、なかには日本語まで流暢な人もいて、洋服はきちんとしていて、スマートフォンやパソコン、バイクを持ち、日本の大学生と大差ないように思えた。

また、あるメコン大生のバイト先である自転車屋にいた日本人の方に話を伺ったところ、自転車屋の学生アルバイトの場合フルタイムで働いて稼げる金額は日本円で月に1万円程度だそうだ。

日本とカンボジアの物価が違うのを考えてもあまりにも少ないように思われる。学

Hosei University Repository

生アルバイトとしてならおこずかい程度になるが、カンボジアでは1カ月生活するのに平均約600ドル程度かかるため、生活するのには苦しい。

また、貧富の差は住まいの違いにも見られた。都市部は比較的コンクリートで作られた家が多く、屋台は多いものの、イオンモールや市場が近くにあった。また王宮近くは綺麗に整備され、鳩の糞もあまり見られないほどであった。しかし、田舎の方へ向かうと、伝統的な高床式住居で、木の板で作られた家が並んでいた。

これから、私達はどうしてカンボジアがこういった状況にあるのか、現在何が必要なのか、私達は何をすればいいのかをよく研究していこうと考えている。

②小学生の異文化交流

日本の小学生にとっても、ビデオレターの作成は自国の文化や慣習、居住地域近くの観光地などについて、改めて学び直す機会となった。例えば畳について紹介する時に、畳の映像をただ撮るだけでなく、何でできているか、どこで作られているかなど、普段何気なく生活していては考えもしないようなことを考えるきっかけとなった。また、言語も文化も異なる相手に、自分と自分の身の回りの環境について伝えるにはどのような工夫をすれば良いのかと、小学生たちが自発的に考えるようになった。例えば、カンボジアにはない、日本の生活を紹介する際には「これはこたつです。」のように道具を紹介するだけでなく、実際に使う様子を撮影することを考えついた。このことにより、分かりやすく説明できるような工夫を考え、実行できるようになったのである。さらに、異文化交流のための学習支援後、小学生達が異文化交流や日々の学びに積極的な姿勢を見せるようになったことを各担任の先生より報告された。このように、主体的に考え、取り組む学習を取り入れたことにより、小学生らの学習意欲が高まったことが確認された。

梅若小学校に趣いたことにより、ゼミの学生たち自身にも変化があった。小学生たちの、自ら考え行動しようとする姿勢に驚き、感銘を受けた。また、小学生たちが、この撮影法はこの場面に適切か、このような情景を伝えるには、どのようなカメラワークが正しいのか、ということを次々に質問してくるため、私たちが普段意識せずに行ってきたことを、再びアウトプットする機会となった。

MISの活動では、また違った結果が得られた。梅若小学校では5年生を対象としたが、MISでは年齢が様々な子供たちが対象であった。梅若小学校からのビデオレターを上映した際には、一つ一つ場面が変わるたびに子供たちは様々な反応を示した。“面白い”と感じる部分は世界共通のようだ。その後、ゼミ生一人につき3人の子供を担当し、それぞれを1班として返信ビデオレターの制作を行った。各班は担当する子供の性格や性別により、親密度合が大きく分かれた。小さい学年の子の方が人懐っこく、同じ性別である方が親密になりやすい傾向にあった。MISの子供は、梅若小学校の子供と比べると、iPadへの興味の示し方が違っていた。梅若小学校の子供はiPadを見るなりつかんで離さず、自分が撮影したい、編集したい、という子が多かった。反してMISの子供は、興味のある子はゼミ生が編集をしているそばに集まって、眺めているだけで自分がしたい、という子供はいなかった。何が原因でこのような違いが出たのかは明確ではないが、子供たちのメディア機器への興味の示し方の違いは、非常に興味深い。

カンボジアでは比較的裕福な子供たちが集まる小学校でも、校舎は小さく、質素な感じであった。子供たちは、アクセサリー

Hosei University Repository

の有無や、服の汚れなどで、貧富の差が目立っていた。

子供の可愛さ、無邪気さは世界共通であるが、そこに見え隠れする貧富の差は、小学校だけでなく街中でもいたるところに見受けられた。私たちは、自分たちさえ良いという考えをやめ、このような発展途上国の子供たちの教育についても、考えていかなければならない。